

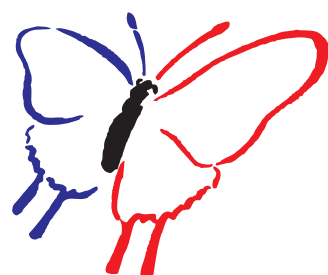


INFOS

日仏整形外科学会広報誌 アンフォ

■会長……………小林 晶
Président ——— A. KOBAYASHI
■書記長……………大橋弘嗣
Secrétaire général ——— H. OHASHI
■幹事……………金子和夫 安永裕司 久保俊一
Membre exécutif ——— K. KANEKO Y. YASUNAGA T. KUBO
■副会長……………瀬本喜啓
Vice-Président ——— Y. SEMOTO
■書記・会計……………青木 清 藤原憲太
Secrétaire et Trésorier — K. AOKI K. FUJIWARA
■名誉会員……………小野村敏信 坂巻豊教
Membre d'honneur — T. ONOMURA T. SAKAMAKI

■事務局：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339
Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON
■発行所：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)
■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2015年を迎えて

日仏整形外科学会会長 小 林 晶

会員の皆様には麗しく2015年をお迎えのことと存じます。今年も何卒宜しく願いいたします。

昨年年第16回SOFJOは塩田悦仁会長以下関係者はもとより参加者、会員の皆様のお蔭で無事盛会裡に終了することができて喜んでおります。参加されたフランス側の3名の学会講演は幸い参加者に大きな刺激になったのではないかと思います。ことにDr. A.Kapandjiの示唆に富んだ哲学的な思想には、強烈なインパクトを受けたのは私だけでなく多くの聴衆の皆様も同様だったと推測しております。

ただ、財政的に困難な問題があり、会員の皆様からは暖かい浄財を戴くことになり、ご迷惑をおかけしたことは申し訳なく、ここに改めてお詫びを申し上げます。なお、この学術集会の模様は雑誌「整形外科」と「日仏医学会会報」に掲載されましたので、お読み戴ければ幸いです。

さて、昨年は七川欽次名誉会長のご逝去が最大の痛恨な出来事でした。創立以来、常に学会をリードされ、細かいことまでご指導を受けて、ここまで発展したのは、全く先生のご努力のお蔭だと言っても過言ではありません。学術集会では常に最前席に座られ、熱心に討論にも参加されたお姿が眼に浮かびます。交換留学生の口頭試問でも、かならず科学的な疑問があれば質問されました。一般的な些事よりも学問への情熱を感じ

ました。先生のリウマチ学会における多大の貢献も忘れてはなりません。終生我々後輩に範を示されたことを、何よりも宝として守ってゆきたいと考えております。先生のご冥福をお祈りいたします。偲ぶ会が京都で滋賀医大の主宰のもとに開催され、私がSOFJOの代表として参加して遺徳を偲びました。その後、七川家からは多大のご芳志を戴いて感謝しております。

今年も3名の交換留学生が選ばれました。これまで約70名以上の方々が渡仏され、大きな収穫を得て帰国して活躍されています。私ども送り出す側としては、帰朝報告を聴く度にこの制度が着実に根付いているのを感じます。どうか今後もこの制度を利用して、両国の交流と研究に磨きをかけて戴きたいと念願しております。また、すでに帰国された先生には、SOFJOのために今後ともご尽力を戴ければ幸いです。

今年5月開催予定の第88回日本整形外科学会では「世界における整形外科学の革新」と題してパネルディスカッションが行われます。吉川会長からフランス編を担当するようSOFJOに依頼がありましたので、参加する旨を伝えております。不肖私が総論的な話をして、あとは股関節を中心に執行部で選びました5名の会員の先生方に、種々の観点から革新の事跡を話してもらうことになっております。このことはSOFJOが日整会との絆を築く良い機会だと考え、精一杯頑張りたいと思っております。

何時も私の挨拶の中ではSOFJOの財政難のことが登場して恐縮ですが、昨今の世情ではあまり寄付金は期待できず、いきおい会費の値上げによるご負担をお願いせざるを得ません。事務局からお願いがゆきました折には、ご理解をお願いいたします。

ところで今年の7月から役員の交替をすることになりました。私自身は任期を越して過去6年間も会長の座にあって、聊か申し訳ない思いとマンネリを避け将来の発展を期すためにも、交替は必要不可欠なことだと判断しております。新会長には金子和夫順天堂大学教授、副会長に大橋弘嗣先生、顧問に瀬本喜啓先生がそれぞ

れ就任されることを執行部で決定しております。その他の幹事の先生方も部分的な交替の時期だと考えますので、後任人事は7月新出発いたします執行部に一任したいと思います。事後承諾の形になりましたが、時間的な制約もありご了承さるようお願いいたします。

これまで私を支えて下さった会員の方々に厚くお礼申し上げます。不行き届きな運営ばかりで、会員の皆様にはご迷惑ばかりかけて申し訳なく思っって忸怩たるものがあります。在任中最も印象に残っているのは、2011年のSOFJOTでSOFJOが世界初の招待国となったことでした。その後もこの国家毎の招待はSOFJOTの行事として定着していますが、今考えても誇らしいことでした。私自身は会長退任後もSOFJOの発展に最大

限尽力したいと思っています。

なお、今年の6月4日～6日にフランスのSaint-Maloで、Philippe Hernigou先生を会長にして第13回AFJOが開催されます。学問の交流はもちろん観光の名所も多くあるノルマンディの海岸ですから、多数の会員の参加を期待しております。

また、2016年開催予定の第17回SOFJOは藤原憲太先生および青木清先生お二人共同の主宰で、瀬戸内海の直島で開催予定になっております。これも風光明媚な場所ですから、多数の会員の参加をお願いしておきます。

最後に会員の皆様の今年のご多幸を心から祈念しております。

Vivent la SOFJO et l' AFJO !



第16回日仏整形外科学会開催記

第16回SOFJOを主催して

福岡大学医学部リハビリテーション部教授 塩田悦仁

このたび、2014年9月6日に第16回の日仏整形外科学会を福岡市のアクロス福岡において開催させていただきましたのでご報告申し上げます。

今回、会長の不徳の致すところで、企業からの資金調達が不調のため、会員の先生方からも寄付を募らざるを得なかったことは、たいへん申し訳なく思っております。幸い多くの会員の先生方や関係各位から多額の寄付金をお寄せいただき、無事に本学会が運営できましたことを心より深謝いたします。

たいへん残念ですが、1987年に本学会を創設され、今日まで育て上げてこられた七川欽次先生が4月21日に急逝されましたことは、痛恨の極みでありました。つきましては本学会においても、先生の追悼講演の特別セッションを設け、小林晶会長と小野村敏信名誉会員から故七川欽次名誉会長の追悼講演をしていただき、参加者全員で先生のご冥福をお祈り申し上げます。

学会自体は、生体力学で世界的に著名なKapandji先生と福岡にゆかりの深いDubrana教授を招待し、次期AFJO会長であるHernigou教授もパネルディスカッションに加わっていただき、100余名の参加者でたいへん内容のある有意義で記憶に残るものにすることがで

きました。

Kapandji先生は86歳と高齢でたいへん心配しておりましたが、無事来日され予定通り、先生の集大成である新著《Qu'est-ce que la BIOMÉCANIQUE? (生体力学の世界)》の内容について《La Passion de la BIOMÉCANIQUE (生体力学への情熱)》と題して創意あふれる素晴らしい講演をされ、昼休みにはサイン会もしていただきました(写真1a, b)。

Dubrana教授は1992年にSOFJOの交換留学生として福岡に来られ、九州大学および福岡整形外科病院で研修されており、現在Brest大学において教授として膝関節外科の臨床を中心にご活躍中ですが、交換留学以来、22年ぶりに来福され、今回は《Nouvelle Technique Chirurgicale pour les lésions du LCA (前十字靱帯の新術式)》について、手術法の変遷から新知見まで充実した内容の講演をしていただきました(写真2)。パネルディスカッションとして《Divers problèmes de la PTH (THAの諸問題)》を取り上げ、次期AFJOの会長であるHernigou教授を交えて活発な討論が行われました。交換留学を終了された6名の先生方の帰朝報告と49題の一般演題が2つの会場においてすべて口演で

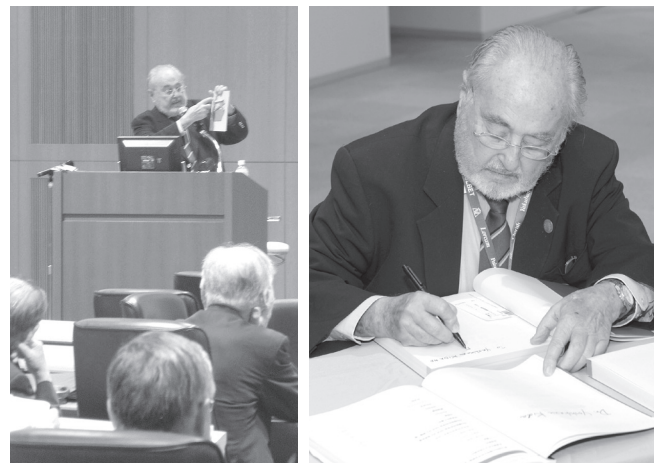
行われました。演題の内訳は、上肢6題、手5題、下肢7題、膝6題、THA6題、TKA6題、脊椎・腫瘍ほか7題でありました。少しタイトになりましたが、ほぼ時間通りに円滑な運営ができましたことは、座長の労をとってくださった先生方や関係者のご協力のおかげであり、たいへん感謝いたしております。

学会終了後には、多数の参加者で近隣のホテルオークラ福岡にて全員懇親会が行われました。アトラクションとして「扇の的」と「本能寺」の演目で筑前琵琶による演奏があり、演奏の後には楽器の演奏体験もさせてもらえ、たいへん好評でした(写真3)。最後に次期AFJO会長のHernigou教授、次期SOFJO会長の藤原憲太先生、青木清先生から学会開催の紹介がありました。2015年Saint-Maloで開催されるAFJOと2016年直島で開催されるSOFJOでの再会を期して閉会となりました。

学会翌日には、福岡近郊の太宰府天満宮と九州国立博物館へのエクスカーションが行われました。学問の神様である菅原道真が祭られている天満宮の本殿で宮司から説明をうけた後、正式参拝を行ない、日仏整形外科学会の隆盛を祈願いたしました。帰りには天満宮

から絵馬や御神酒などのプレゼントをいただきました。参拝後は豆腐料理で有名な梅の花・自然庵において懐石料理をいただきながら、和やかに歓談し学会の疲れを癒しました。昼食後に九州国立博物館へ向かいましたが、まず博物館の奥に隣接している茶室で、本格的な茶道体験をいたしました。いずれのフランス人も、神社本殿での参拝や茶道体験は初めてであり、たいへん喜ばれました(写真4)。その後、アジアを中心とした展示物の多い九州国立博物館を見学し、日本の典型的な文化に触れていただきました。次回のAFJOとSOFJOでの再会を期して解散し、すべての学会日程が無事終了いたしました。

最後に今回のSOFJO開催に際して、暖かい御支援を賜りましたすべての皆様に改めて心より感謝申し上げます。



●写真1a, b



●写真2



●写真3



●写真4

《第1会場》	特別講演1	座長：岩本幸英
帰朝報告	Nouvelle technique chirurgicale pour les lésions du LCA Frédéric Dubrana（Hôpital Cavale Blanche, Centre Hospitalier Régional et Universitaire de Brest）	
2012年度 日仏整形外科学会交換研修帰朝報告ーフランスの夏と股関節外科ー 齊藤正純（京都府立医科大学大学院運動器機能再生外科学（整形外科））	一般演題2（下肢）	座長：安永裕司・青木 清
日仏整形外科学会交換研修報告2012年 渡辺 新（いちほら病院整形外科）	大腿骨転子部骨折に対して新しい髄内釘“Magnum nail”を使用して観血的骨接合術を施行した治療経験 茨木一行（愛仁会高槻病院整形外科・関節センター）	
フランス留学帰国報告 小池洋一（仙台赤十字病院整形外科）	二次性変形性股関節症に対する臼蓋棚形成術の長期成績 飯田 哲（松戸市立病院整形外科）	
2012年 日仏整形外科学会交換研修報告 長谷川浩士（山形大学医学部整形外科）	脳性麻痺の股関節に対する軟部組織解離術の手術適応 松林昌平（長崎大学病院整形外科）	
人工関節置換術におけるフランスの伝統と革新 高澤 誠（千葉大学大学院医学研究院総合医科学講座東千葉メディカルセンター）	麻痺性内反凹足変形に対するギプス矯正療法の新たな試み 金城 健（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター整形外科）	
2014年 日仏交換研修帰朝報告ーパリとリヨンから日本の整形外科を考えるー 大槻周平（大阪医科大学整形外科）	70歳以上高齢者のアキレス腱断裂に対する治療経験 松田匡弘（福岡整形外科病院）	
一般演題1（手）	エコーガイド下のボツリヌストキシン注射の実際 松林昌平（長崎大学病院整形外科）	
粘液嚢腫に対する低侵襲手術 菊池克彦（国家公務員共済組合連合会千早病院整形外科）	前脛骨動脈の走行とイリザロフワイヤーの刺入部位の解剖学的検討 松林昌平（長崎大学病院整形外科）	
伸筋腱の処置に工夫を加えた術式によるヘバーデン結節に対するDIP人工関節置換術の経験 櫛田 学（櫛田学整形外科クリニック）	一般演題3（膝）	座長：井原秀俊・星 忠行
徒手整復不能な母指IP関節脱臼：症例報告と新しい整復方法 小畑宏介（順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科）	内側型変形性膝関節症における前十字靱帯の損傷度合と軟骨欠損部位との関係 桐月伸輔（愛仁会高槻病院整形外科・関節センター）	
橈骨遠位端骨折に対する小皮切手術 内藤聖人（順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科）	ACL 2重束再建術における術中側面レントゲンの有用性の検討 富原朋弘（島田病院整形外科）	
手術ロボットを用いた胸腔鏡的肋間神経および横隔神経採取 宮本英明（東京大学医学部附属病院救急部・集中治療部）	New knee ligaments Frédéric Dubrana（Hôpital Cavale Blanche, Centre Hospitalier Régional et Universitaire de Brest）	
パネルディスカッション（THA の諸問題）	変形性膝関節症における内側半月変位量と疼痛との関連 木島泰明（秋田大学大学院整形外科）	
Dual Mobility CupとDirect Anterior ApproachによるTHA脱臼予防：導入初期の問題点とその対応策 本間康弘（順天堂大学整形外科学講座）	Phase III Clinical Trial：Implantation of autologous chondrocytes cultured in gel versus mosaicplasty for the treatment of chondral lesions of the femoral condyles Frédéric Dubrana（Hôpital Cavale Blanche, Centre Hospitalier Régional et Universitaire de Brest）	
The risk of dislocation after hip revision is related to the extent of osteolysis Philippe Hernigou（University Paris East, France）	ロボットスーツ単関節型HALの使用経験 鎌田 聡（福岡大学リハビリテーション部）	
Influence of Bearing Surfaces on Fretting and Corrosion of the Morse Taper:is there a Clinical Consequence in the Long Term? Philippe Hernigou（University Paris East, France）	特別講演2	座長：塩田悦仁
人工股関節全置換術に対して後方から前方アプローチに切り替えた時のインプラント設置位置の変化 越智宏徳（順天堂大学整形外科学講座）	La passion de la BIOMÉCANIQUE Adalbert I. Kapandji（Clinique de l'Yvette, Longjumeau）	
特発性大腿骨頭壊死症に対するセメントレス人工股関節全置換術の成績 齊藤正純（京都府立医科大学大学院運動器機能再生外科学（整形外科））		
臼蓋形成不全股に対するセメントレス人工股関節全置換術における塊状骨移植の工夫 老沼和弘（船橋整形外科病院）		

《第2会場》

一般演題4（脊椎・腫瘍ほか）座長：瀬本喜啓・益田宗彰

3-D MRI/CT fusion imageでみる頸部神経根症の病理－神経根の扁平化について－

鴨川淳二（白石病院脊椎スポーツ外科）

高齢者介護施設に入所中の高齢者における骨粗鬆症性骨折のリスクと骨粗鬆症の治療率

小池洋一（仙台赤十字病院整形外科）

骨粗鬆症性新鮮椎体骨折に対するテリパラチド治療の疼痛および圧潰抑制効果の検討

山本りさこ（厚生連吉田総合病院整形外科）

特発性膝骨壊死に対するテリパラチドの有用性について

南島広治（南島整形外科）

上腕骨近位端骨折症例における健側上腕骨頭骨密度の検討

山田光子（藤田保健衛生大学第二教育病院整形外科）

悪性骨軟部腫瘍患者に対するリハビリテーションの現状と課題

小山内俊久（北海道がんセンター腫瘍整形外科）

時差症候群がスポーツのパフォーマンスに与える影響

塚原由佳（江戸川病院／慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター）

一般演題5（上肢）座長：牧 信哉・伊崎輝昌

思春期特発性側弯症（Lenke type 1, 2）に対する後方矯正固定術後の肩バランスの変化

荒瀧慎也（岡山大学病院整形外科）

鎖骨遠位端骨折に対するAnatomical Locking Plateの治療成績

能瀬宏行（横浜市立みなと赤十字病院整形外科）

ヒンジ付き創外固定を用いて治療した上腕骨遠位部粉碎骨折の治療経験

斉藤憲太（東京医療センター整形外科）

透析シャント側に発症した橈骨遠位端骨折の治療

杉山陽一（順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科）

近位列切除術後に発症した橈骨遠位端骨折の一例

井下田有芳（順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科）

障碍と向き合う藝術家：ピアニスト安川加壽子の場合

仲田公彦（こすがクリニック整形外科）

一般演題6（TKA）座長：藤原憲太・花田弘文

当院におけるファイン人工膝関節置換術後可動域およびPosterior Condylar Offsetの検討

吉居啓幸（船橋整形外科病院）

HLS evolution Uniの使用経験

平中崇文（愛仁会高槻病院整形外科・関節センター）

人工膝関節置換術における後内側関節包縦切による選択的伸展ギャップ拡大

金山竜沢（船橋整形外科病院）

大腿骨後顆プレカットトライアルを用いた人工膝関節置換術におけるjoint lineの検討

上西藏人（船橋整形外科病院）

感染性人工膝関節に対する二期的再置換術の臨床的成績

水木伸一（松山赤十字病院リウマチ膠原病センター）

人工膝関節全置換術後Stiff kneeに対する治療経験－2例報告－

金澤博明（順天堂浦安病院整形外科）

一般演題7（THA）

座長：田中千晶・飯田 哲

3D-テンプレートを用いたTHA大腿骨操作に伴う内外閉鎖筋停止部損傷の評価

田巻達也（船橋整形外科病院人工関節センター・東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野）

3D-CTを用いた短外旋筋群停止部の描出

松本和章（船橋整形外科病院放射線部）

DAAを用いたTHAにおけるスパイダーアームの有用性について

楊 裕健（大阪府済生会中津病院整形外科）

DAA-THAにおけるセメントレス・ショートステム（Optymis）の有用性と短期成績

田巻達也（船橋整形外科病院人工関節センター・東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野）

THA術後の関節可動域の改善率

妹尾賢和（医療法人社団紺整会 船橋整形外科病院理学診療部）

Short stemを使用したTHAにおいて疲労骨折をきたした2例

三浦陽子（船橋整形外科病院）



人工関節置換術におけるフランスの伝統と革新

千葉大学整形外科
高澤 誠 先生

はじめに

2013年10月から3ヶ月間の日仏整形外科学会のExchange fellow shipとしてフランスのパリとリヨンに臨床留学させていただきました。私にとってこの研修はかけがえのない経験であり、また人工関節外科医として自分の色を持つことができました。研修の内容や現地での生活についてご報告いたします。

あこがれのPARIS

10月1日、私たち家族はあこがれのパリに降り立ちました。言葉や文化、建物や芸術どれをとってもおもしろいと感じてしまいワクワクしていました。研修開始までに3日ほど余裕があったので観光やショッピング、

美術館を楽しみ、夕食はブラスリーでフランスの家庭料理を堪能しました。フランス競馬の凱旋門賞に参加したところ、娘たちが着ていた『袴ドレス』がフランス人の目に留まったらしく国営放送に取材されるというエピソードがありました。

さてPARISでの研修ですが、股関節で伝統のある非常に有名な大学病院であるCochin病院でMoussa Hamadouche教授に大転子切離法や高度な再置換術を3週間研修しました。郊外の大学病院Henri Mondor病院では Philippe Hernigou教授に大腿骨頭壊死症に対する骨髄幹細胞移植を数日研修し、またPARISから1時間半ほどにあるルーアンという街のCedre病院ではPascal Vie先生には牽引手術台を用いたDAA-THAもご指導いただきました。Cochin病院で習ったフレンチテクニックと言われる本場のセメント法は、いままで日本で習っ

てきたセメントテクニックとは結構違うことがわかりました。また『伝統的』イコールある意味古い手技の中には現在でも使える大切な事柄がいくつもあることに気がつきました。また高度な再置換術には本当に驚かされました。もし自分が執刀したらいったい何時間かかるのだろう？という症例を3時間半でうまくまとめる奥義を目の前で手術に入って体験できたことは最高の経験でした。牽引手術台を用いたDAA-THAはBMI 30をゆうに超えるという症例に小さな皮切なのに全く無理のない手術がスムーズに行われていました。よってPascal Vie先生は1日4, 5件のTHAを普通にこなされていました。Vie先生は親日家でこと細かく手術を教



●牽引手術台を用いたDAA-THA



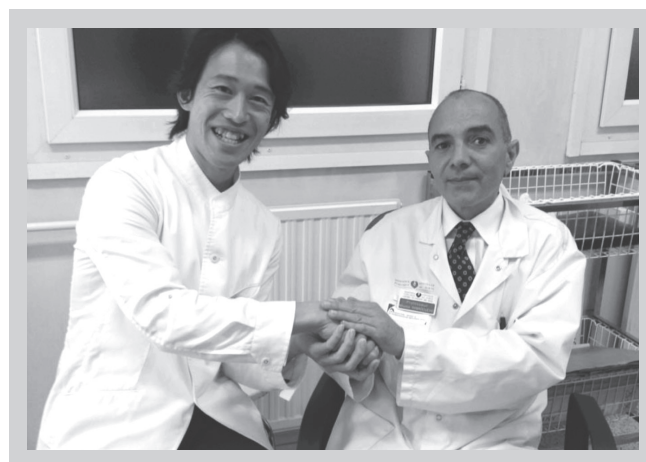
●Paskal Vie先生と



●Paskal Vie先生と



●Revision THA



●Moussa Hamadouche教授



●エッフェル塔にて家族と



●凱旋門賞に参加

えてくれただけでなく、夕食のあとルーアンの街を散策しながら歴史を教えてくださいました。術者だけではなく人としても本当に尊敬できる先生でした。前半の最後には SOFCOT フランス整形災害外科学会に参加し、Iliopsous impingement という新しいトピックスを学びました。

こうして前半はフランスの伝統と革新を経験することができ、またフランスの文化・芸術・ファッション・グルメを家族で堪能することができました。

LYONへ

11月16日、PARISをあとにしTGVで3時間、フランス第2の都市リヨンに到着しました。リヨンは日本で言う“箱根”または“京都”のような場所で、素晴らしい景色と治安の良さがあります。また美食の街としても有名で、料

理人が世界各国から修行にきています。ちょうどFête des Lumièresという街を挙げての光の祭典が行われており、幻想的なイルミネーションは忘れられません。LYONでは私のフランス研修のメインとなるフランスで開発されたインプラントCORAIL STEMとDual mobility cupの適応と手術手技を研修しました。Centre Orthopedique Santyという人工関節センターで3週間みっちりTHAとTKAを学びました。Michel Bonnin先生とTarik Aitsi Selmi先生、この二人の匠はそれぞれが1日8件、週25件以上の人工関節をいとも簡単にこなす世界のTOP Surgeonです。つねに近隣の国からフェローが研修にきており、手技を細かく指導してくれます。おかげでTHAに関してはCORAIL STEMが日本人にとっていいシステムかどうか？私の臨床研究の課題が見つかりました。また毎日繰り返されるTKAの手順を叩き込まれたので、フランス流？



●Michel Bonnin先生



●Tarik Aitsi Selmi先生



●イタリアンフェローと異文化交流



●Michel Bonnin先生のご自宅にて

のTKAテクニックを体得することができました。最後にEdouard Herriot病院ではOlivier Guyen先生にナビゲーションを使用した人工関節を研修しました。ナビゲーションを使用する際のピットフォールなど詳細な説明を教授だけでなく、たくさんの医師が優しく教えてくださいました。この頃になると私のつたない外国語でもディスカッションできるようになり、より多くのことを吸収できるようになっていました。

最後に

この研修で習得したことを今後の臨床、研究に生かし



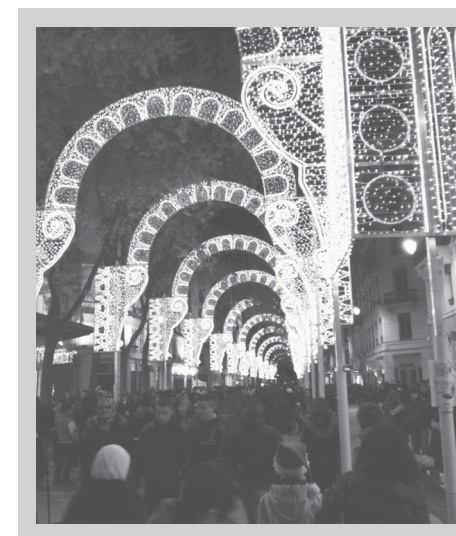
●Olivier Guyen教授と



●テットドール公園のオブジェ



●旧市街 ローヌ河のほとり



●Fête des Lumières

自分の色を出して行きたいと思っております。また、もう一つの目的であったフランス人医師と個人的なパイプ作りですが、PARISとLYONそれぞれの大学病院の教授と、人工関節センター長から今後は我々千葉大学股関節グループの後輩達が希望すればいつでも研修に送ってくれとお言葉を頂くことができました。今後も交流をふかめていきたいと思います。この留学を導きサポートしていただきました日仏整形外科学会の小林会長をはじめ、アドバイザーである大橋弘嗣先生、松戸市立病院の飯田哲先生、役員の先生方に厚く御礼申し上げます。

また留学の機会を与えていただきました千葉大学整形外科の高橋教授に心より感謝申し上げます。

私達の フランス 研修

2013年度交換研修報告

2

フランス・ストラスブールでの臨床研修 (2013年10月-2015年6月・途中経過報告)

順天堂大学整形外科
市原理司先生

2013年10月から日仏整形外科学会の交換留学制度を利用してフランス北東部の都市StrasbourgにあるStrasbourg大学病院手外科センターでPhilippe Liverneaux教授の元、手外科・マイクロサージャリーの研修を行っております。現在整形外科医11年目で本格的に手外科を志したのは順天堂大学浦安病院に赴任した医師8年目の頃と記憶しています。

はじめに

私の所属する順天堂大学整形外科学教室は現主任教授である金子和夫教授をはじめ、多くの先輩方がフランスでの留学を糧に活躍されており、私も兼ねてからフランスの手外科手術に興味を抱いていたため今回の留学の運びとなりました。

昨今のフランスの経済情勢からフランスでの長期滞在のためのビザ取得は困難を究め、研修のための留学

実現まではかなり険しい道のりでした。今回はその話は書き出すと止まらないので興味のある方は日仏整形外科学会の会場で声をかけていただければと思います。では以下、順を追ってフランス・ストラスブールで現在行っている研修内容を報告していきます。

Strasbourgという町について

ドイツとの国境に位置し、過去12回にわたりドイツとフランスの間で領土をめぐる争いがありました。そのためEU圏の平和の象徴として欧州議会(European council)がStrasbourgにおかれています。現在はドイツとの文化交流も盛んでフランスの中でも非常にドイツ色の強い地域となっています(アルザスと呼ばれています)。

気候は北海道と同じくらいの緯度に位置するので、冬は厳しい寒さですが、春夏はとても過ごしやすい気候になります。毎年11月の最終土曜日からクリスマス



●左：ドイツとフランスの国境に位置するライン川にかかるヨーロッパ橋。昔は橋の中央に検問所があったが今は両国民が自由に行き来しています。中央：クリスマスの飾りつけ。右：ライトアップされたノートルダム大聖堂

まで続く Marches de Noel(クリスマスマーケット)はStrasbourgの冬の風物詩で世界各国から300万人の人が観光に訪れます。私も2年にわたり経験しましたが非常に感慨深いものがありました。

研修について

研修拠点は大きく分けて2か所あり、主にHand Surgeryの研修はIllkirch(イルキッシュ)というStrasbourgの中心からTramで20分くらいの隣町にあるTraumatology centerで行われています。ここでHand Surgery部門を統括するのがPhilippe Liverneaux教授で、彼は世界的に有名なHand Surgeonで、彼の元で研修したいというHand Surgeonが世界各国から多く訪れています(私もその一人です)。彼は日仏交換留学のフランスからの第2期生で日本を訪れたことがあり非常に親日家です。

研修の一日の流れですが、朝8時から全員(教授、staff4人、レジデント6名、医学生5名)でカンファレンスを毎日行います。内容は前日の当直帯で来たすべての救急患者をレジデントがプレゼンし、前日のすべての手術の内容をスタッフがプレゼンします。カンファレンスが終わると手術、外来、救急外来の3班に分かれて仕事を開始します。

(1) 手術について

私の研修の大半は手術室での教授のアシスタントで

す。主に月曜日と水曜日の午前中にLiverneaux教授の手術にアシスタントとして入るのですが、ここでは日本のような器械出し看護師はおらず、私を含むレジデントが手術のためのすべての準備と術者の助手を行います。手術は術者(教授かスタッフ)と助手(レジデント)の2人で行います。9時から昼の2時半までで多い時で10件の手術をこなすため、手術室にいる間は目が回るような忙しさです。ただ、準備する器械が手術によってすべて決まっているので、器械を探し回すことはほとんどなくすべてがシステム化されています。

手術の内容は手根管症候群、Dupuytren拘縮、ガングリオン、デ・ケルバン病など5-10分くらいで終わるものが最初の4-5件を占め、その後で難易度の高い手術に移っていきます。こだわりの手術法を紹介すると手根管症候群は手掌においた15mmの皮切で5分以内に終わらせます。肘部管症候群は3cmの皮切で15分以内に前方移行まで終わらせます。Dupuytren拘縮は皮切を置かずに18Gの針を用いて皮膚の上から緊張の強い腱膜を切離していき、これは3分くらいで終わります。難易度の高い手術としては四肢麻痺患者のSpastic and Retracting Handに対してTenotomy, Neurotomyを数多く行っています。この手術は介護者の負担を減らすのにとても役に立っているそうです。日本ではあまりやられていない人工手関節全置換・部分置換術も症例を限って適応を決めて月に1件くらいのペースで行っています。母指CM関節症は日本ではSuspension



●左：Traumatology centerの外観。右：Staff meetingでLiverneaux教授がlectureしている様子

and Interposition arthroplastyが盛んにやられています
が、こちらではTrapezectomyだけで十分という考えの
ようで早いと15分くらいで終了します。術後の患部の
腫脹も、ほぼなく患者満足度も高いのでこの方法で十
分だという気がします。外傷も盛んにstaff doctorが行
っており、橈骨遠位端骨折は15mmの皮切でトライシ
難易度の高い症例は20mmを限度に最少侵襲手術を心
がけています。手指の骨折では日本ではplate, screw固
定が主流ですがK-wireを駆使した創外固定が盛んに行
われています。

手術件数としては手根管症候群が年間1,000件、橈骨
遠位端が年間500件くらいです。年間総手術件数とし
ては約4,000件で、教授と4人のスタッフでこなします。

私の研修初期の6か月は主に教授やstaffのアシスタ
ントを務めていましたが、6か月を過ぎたころから定型
的な手術（手根管、バネ指、橈骨遠位端、抜釘、腱縫
合など）は執刀させてもらえるようになりました。こ



●左：Meta HUSという創外固定装置。右：New clip社製のプレート



●左：StaffのDr Talebのpulley再建手術の助手をしている様子。中央：術者として母指中手骨基部骨折の創外固定をしている様子。
右：Liverneaux教授の手根管手術の助手をしている様子。

れまで半年で約50例をフランス流の手法で執刀し、自
分がこれまで日本でやってきた方法と比較しながらそ
の違いを肌で体験できたのは大きな財産です。

(2) 外来について

火曜日、木曜日は一日中Liverneaux教授の外来に陪
席して患者さんを一緒に診察し意見交換をしながら進
めていきます。「沈黙は罪」で常に意見を求められる
ので患者さんと教授との会話も真剣に耳を傾けて聞い
ています。教授は患者さんとの会話はフランス語です
が、私には英語で指導してくれます。時には日本語も
出てきます「はい、どうぞ」「よいしょ」など。午前、
午後でだいたい20人くらいずつ時間をかけて診ていき
ます。後で論文作成用のデータがまとめられるように
DASH, VAS, 握力, ピンチ力などは全患者で評価します
（これを計測するのもレジデントの大事な仕事です：こ
こはフランス語を駆使しながら患者さんに問診を行
っていきます）。

日本のように紹介状なしでくる患者はほとんどおら
ず、必ず近医で紹介状を貰い予め電話で予約をとって
きます。近医で手術が必要と言われてくる患者がほと
んどなので、来たら手術の説明をして予定を立てて帰
っていきます。外来の多くを占めるのが手根管症候群
の患者で多い時は一日10件近く手術の説明をしていま
す。変形性手指関節症の患者も多く、DIP関節固定、
人工手関節置換術、近位手根列切除術、4-corner fusion
などが説明されていました。後述しますが、腕神経叢
麻痺の患者が意外に多く、2か月に一度はDa Vinci手術
をしています。

(3) 救急外来

救急外来はアルザス地方の全土から2時間近くかけて
Traumatology centerに救急車が患者を運んでくるので常
に忙しく、常時レジデント2人で患者の治療に当たってい
ます。手術が必要な症例が来ると、その日の救急担当のス
タッフと相談してすぐに手術の予定を組みます。当日緊急
手術もあれば、1-2日後に組むこともあります。多くは切
傷に伴う腱断裂・神経血管損傷、爪周囲感染、フレグモー
ネですが、切断指、挫滅、デグロービング損傷などの複合
損傷も多く、これらの症例の多くは当日に行っています。

夜間・休日の当直体制についてですが、すべての患
者を受け入れ、診察・創縫合までの処置を行うレジデ
ントが一人病院に常駐し、手術が必要になった症例に

対してはstaff doctorが1名とレジデント1名がオンコー
ル体制で自宅待機しています。私も人が足りないときは
オンコールを手伝っていましたが、週末だと土・日
で10件近い緊急手術が行われていました。

(4) Robotic surgeryについて

Strasbourg大学はDa Vinci手術のヨーロッパの研修
拠点で、常にircadという研修センターで世界各国から
様々な分野の外科医が研修に訪れています。2013年は
Liverneaux教授が会長を務めるRAMSESというロボッ
ト手術の学会をStrasbourgで行い、日本からも10人近
くの手外科医が来られました。

Hand Surgery部門でも腕神経叢損傷の患者はすべて



●左：Traumatology centerのSOS mainのロゴ。中央・右：毎年2回発刊されるLe Pointという情報誌で病
院のランキングが掲載される。今年はSOS mainの中で4位でした。



●左：日本から参加された先生方とircad前で記念撮影。右：学会のLive Surgeryで教授の助手をしている様子。

Strasbourg大学病院でロボット手術をしています。内容としてはOberlin法、肋間神経移行、長胸神経剥離など多彩で興味深いです。私も含め日本からのフェローは優先的にこの手術に入らせてもらえます。手術は主に金曜日の午前中に行われ、神経剥離など簡単な手術では1日2件が組まれ、肋間神経移行など胸部外科と組んで行う手術は1件を朝から夕方くらいまで行います。私はすべての手術に助手として手洗いさせていただけるので、飲まず食わずでの長丁場の手術なので終わるとへろへろになります。

しかしながらここでの経験が評価されて毎年2回Strasbourgのircadで行われているRAMSES courseというロボット手術の研修会でExpertとして参加させていただき、脳外科の教授やイタリア手外科学会のPresidentにDa Vinciの操作法をlectureさせていただくという貴重な機会を得ました。Course終了後にはExpertとしてのDiplomaもいただきました。

(5) 学術面について

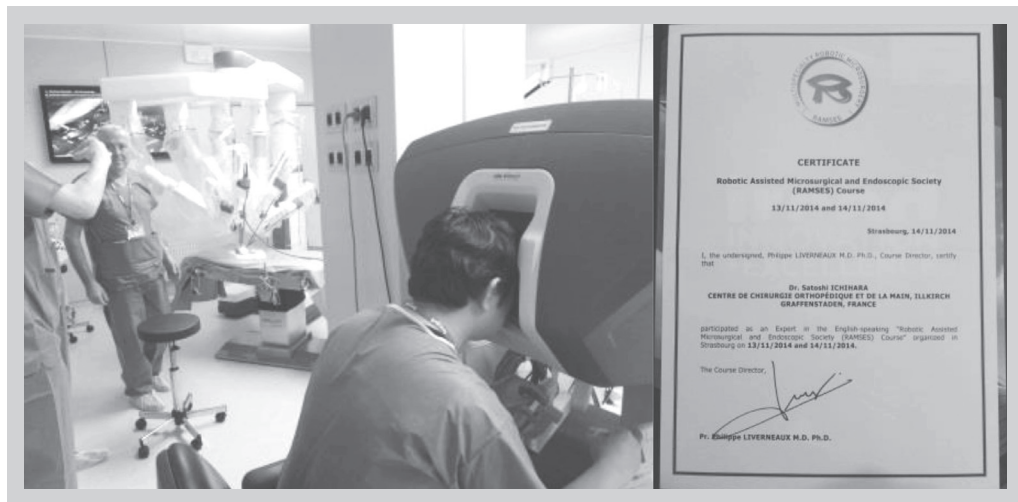
日本からのフェローはフランス語でのコミュニケーションの問題から救急外来、当直などの仕事が免除されています。その代りに学術的な仕事が多く与えられます。私に与えられている学術的な仕事の内容を以下に列挙します。

1) 週に1度、7分でその週に行われる症例のcase presentationをPowerpointで作成して行います。これは他のレジデント達も行います。毎週火・水曜に17時から19時までstaff meetingがありそこで行います。1つの

疾患について解剖・診察所見・手術適応・手術法・合併症・後療法など詳細に教授・staffからつまみが入るので念入りな準備が必要です。

2) 2週に1本のペースでJournalのreviewが回ってきます。これはLiverneaux教授がヨーロッパの有名な手外科、マイクロ関連のJournalのほぼすべてのEditorとなっているためたくさん依頼されます。日本で整形外科医として働き始めてからこれまで一度もReviewなどというものをしたことがない自分にとって最初は苦痛でした。しかし何度も依頼されているうちに最初は1週間近くかかっていたものが最近では1日かからずに終わるようになりました。こうした努力の甲斐があって2014年のフランス手外科学会の役員会でJournal of Chirurgie de la MainのInternational boardにLiverneaux教授が推薦してくださり承認され、今年からJournal of Chirurgie de la Mainの査読委員として今まで以上に多くのReviewをさせていただいております。

3) こちらでは手術が終了ランチの後15時くらいから帰宅までが執筆活動に充てられます。論文執筆に関しては多くの論文を書くチャンスが貰えます。Liverneaux教授はScientific workにも非常に優れた方で、2014年は手外科センターから30編以上の論文がpublishされています。珍しい症例などがあればすぐにCase reportをまとめて論文にするように依頼が来ます。他のレジデント達も6か月の研修期間に一人につき2本ずつ論文投稿が義務付けられているため、彼らが手外科に関するCase seriesの論文を作成するのも手伝っています。教授が「人生かけてやる



●左：ロボット手術でLectureをしているところ。右：Expertとしてcourseに参加し授与されたdiploma

仕事だ！」と特に力を注いで行っている人工手関節置換術とDa Vinci手術に関する論文(Review)をすべて私に任せていただけたことは非常に光栄なことでした。このように毎日が非常に多忙ですが学術活動に日本ではあまり時間が割けなかったため、とても充実しています。

休日について

土日は学会がなければ完全にオフなので家族との時間が過ごせます。ドイツまで歩いて行って食事をしたり、マイカーでアルザス地方を巡って美味しいワインを飲んだり、街を散策したりと日本では味わえない経験がたくさんできます。今年の8月にはLiverneaux教授の夏季休暇に合わせて休みをいただき、家族で「南仏1周旅行」を2週間かけて敢行しました。走行距離3,500kmと信じられないくらいの距離を家族で移動し、たくさんの思い出を作ることができたことは家族の大切な宝です。



●南仏のCassisという港町でCalanquesと呼ばれる天然の入り江を巡る遊覧船のデッキにて

学会参加について

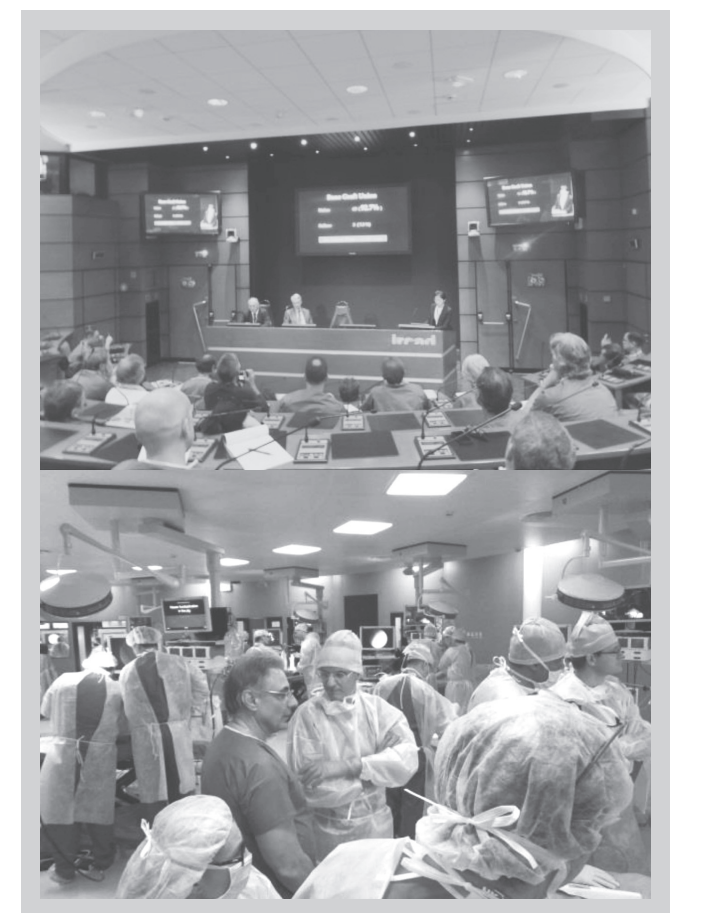
StrasbourgではHand Surgeryに関する学会が数多く開催されます。すべてレジデントとして参加できるので非常に安く参加できます。Liverneaux教授が主催する学会はゲストとして無料で参加出来ます。特に毎年2回Strasbourgで行われるヨーロッパ手関節鏡学会は前腕のカダバーを用いたトレーニングなのでとても勉強になります。

2014年は2月と7月にStrasbourg医学部全体での学術

講演会があり基礎研究から臨床研究まですべての部門から発表がありました。なぜか私が選ばれ手外科センター代表でRobot Surgeryに関して講演を行ってきました(私以外は全員フランス語での講演でしたが…)

また今年からフランス手外科学会のjunior memberに推薦いただき、学術集会で発表する機会を得たので、12月にパリで行われたフランス手外科学会で2題ポスター発表をしてきました。

2015年は4月にドイツ・ハンブルグでの人工手関節に関する招待講演、5月にStrasbourgで行われるフランスマイクサージャーリー学会(Liverneaux教授が会長を務めます)、ドイツ・フランス共同開催の外傷学会での発表、6月にはヨーロッパ手外科学会から毎年出版される上肢再建手術に関する本の執筆と仕事が目白押しです。残り6か月はハードな毎日になると思いますが、せっかくだいたい貴重な機会なので是非良い結果が出せるように努力を続けていきたいと思っています。



●ヨーロッパ手関節鏡学会にて。
上：講義の様子。下：cadaver trainingの様子。



●Strasbourg医学部全体で行われた講演会での様子。たかだか20分の講義でしたが足はガタガタ震えていました。



●左：フランス手外科学会でのポスター発表。“External Bone Remodeling”と“Garner's Procedure for Kienbock disease”という内容で発表してきました。右：フランス手外科学会junior memberのDiplomaを学術集会総会の壇上で会長から手渡されました。

最後に

近年欧米各国での臨床研修が、その国での医師免許がないとほぼ不可能になってきつつあります。ある米国の有名なClinicでは手術見学のために多額の見学料を支払わせるという事態も発生しているそうです。一方でフランスにおいては短期の研修(3か月以内)においては何の問題もなく臨床研修が行えているようです。ただ私のような長期臨床研修(半年以上)のための長期滞在ビザ取得は困難を極めます。この問題を解決すべく現在、Strasbourg大学と順天堂大学との間での大学間協定を結ぶ準備をしております。大学間協定が締結されればフランス国家から正式に臨床研修の許可が下りるため、長期滞在ビザが容易に取得可能となり、住居の賃貸契約・銀行口座の開設などの諸問題もすべて解消されます。また、今年から金子和夫教授と連携をとりながら当大学医学部6年生の短期研修施設としても門戸を開放しております。

今後も私の後続く日本の先生方がフランス国内で

の長期臨床研修を希望される際に、よりよい研修が行えるように努力を続けていきたいと思います。日仏整形外科学会会員の先生で手外科に興味を持ちフランスでの臨床研修を希望される先生は是非御連絡いただければと思います。短期での見学でも随時受け付けております (Email: s.ichihara1010@gmail.com)。

私がストラスブールに滞在中に日本から数多くの手外科の先輩方が見学に来られ、友好を深められたことも私にとって非常に大きな財産となりました。

最後になりましたがこのような貴重な研修の機会を与えてくださった会長小林晶先生、長期の臨床研修を全面的にサポートして下さっている金子和夫教授、日仏整形外科学会役員の先生方、そして私のフランスでの臨床研修に快くついて来てくれ、わんぱく盛りの息子の面倒見ながら家を守り、言葉も文化も異なるフランスの地で長女を無事出産してくれた最愛の妻に心から感謝いたします。



●慶応大学整形外科の越智健先生とドイツ・フランスの国境にかかるヨーロッパ橋の前で：2014年2月



●滋賀医大整形外科の児玉成人先生とドイツの田舎町Durbachにある古城を改築して作られたレストランのテラスにて：2014年5月



●済生会下関病院整形外科部長の安部幸雄先生と滋賀医大整形外科の竹村宜記先生とStrasbourgの観光名所プチ・フランスの広場にて：2014年6月



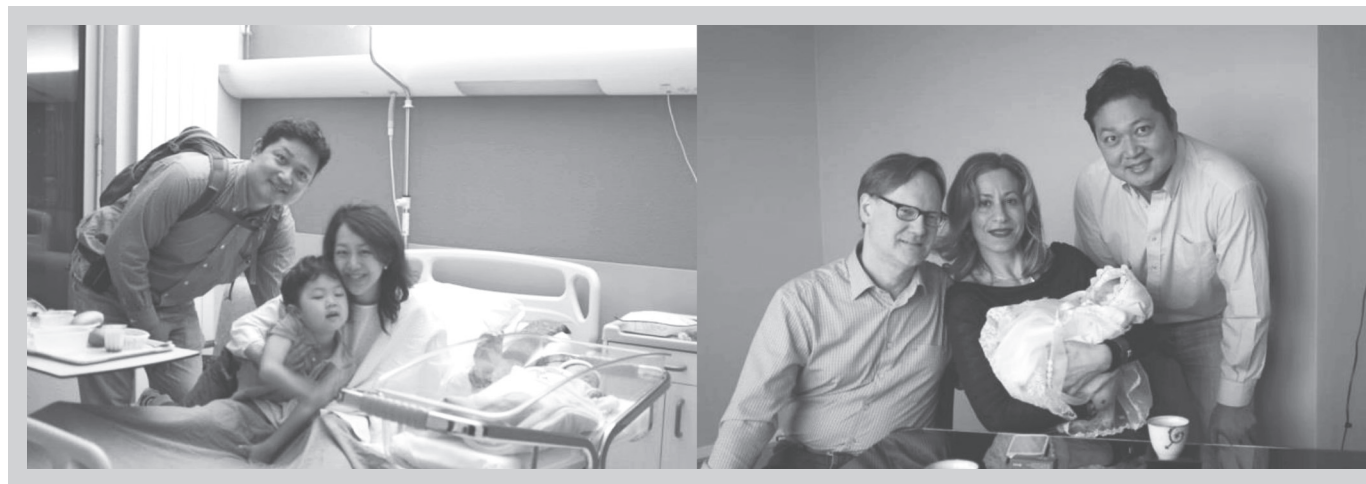
●順天堂浦安病院整形外科の原章先生と後輩の山本康弘先生とKaysersbergのミシュラン2つ星レストランの前で：2014年6月



●広島大学形成外科の奥原裕佳子先生とライン川にかかるヨーロッパ橋の中央で：2014年9月



●関東労災病院整形外科の深澤克康先生とフランス手外科学会の夜にパリのお好み焼き屋にて：2014年11月



●左：出産直後の家族写真。右：退院翌日に自宅に御見舞いに来て下さったLiverneaux教授夫妻。

私達の フランス 研修 3

2013年度交換研修報告

日仏交換研修を振り返って

東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター整形外科
越 智 健 介 先生

2014年1月13日から6週間、日仏整形外科交換研修としてスイスならびにフランスの合計6施設を訪問させて頂きました。非常に慌ただしい日程でしたが、充実した日々を過ごすことができました。簡単ですが、以下にご報告させて頂きます。

チューリッヒ訪問

渡欧1週目は、スイス・チューリッヒにあるBalgrist HospitalとSchulthess Klinikを訪問致しました。初日は訳も分からないまま地図のみを頼りに雨の中を歩いて病院に向かったのですが、今年のチューリッヒは暖冬で助かりました。

Balgrist Hospitalは、チューリッヒ大学整形外科の専属病院です。こちらの手の外科教授・Nagy先生はRA

にもご造詣が深く、Nagy先生がこれまでに開発されてきた各種人工手関節の実物も拝見させて頂き、大変参考になりました。また大阪大学から留学されていた三宅潤一先生には大変お世話になりました(写真1)。

Schulthess KlinikはRA手術で有名なprivate病院で、当科の桃原教授や岩本先生が日欧リウマチ外科交換の中で訪問されたこともある施設です。トップのHerren先生はリウマチ手の外科で有名な先生で、日本でもおなじみの先生です。多彩な関節手術を拝見しましたが、Herren先生が発表されたPIP関節に対する掌側アプローチで、ご自身が独自に開発した人工関節置換術をされていたのがとても印象的でした。また論文共同作成や共同研究のお話も頂き、今後に繋がる一歩となりました(写真2)。



●写真1



●写真2

ブレスト訪問

渡仏して最初の2週間は、ブルターニュ地方にあるブレスト大学整形外科でお世話になりました。当科の斎藤朝海先生が日仏整形外科交換研修として訪問された地です。ほとんど毎日雨が降るのに驚きましたが、現地の先生のお話ですと例年のことだそうです。教授のDuburana先生ご夫妻には海岸線の美しいブルターニュ観光に連れて行って頂いたり、美味しいお食事に連れて行って頂いたりして、大変楽しい時間を過ごして参りました(写真3, 4)。

臨床面では、主に手の外科教授Le Nen先生の鏡視下手根管開放術から腕神経叢麻痺の再手術まで、多彩な手術を見せて頂きました。Le Nen先生のご自宅にも泊めて頂きましたが、南仏風の趣のあるご自宅で満喫させて頂きました。またこの間、ナントのBellemere先生も訪問させて頂き、そのアイデアや臨床に対する姿勢に大きな感銘を受けて帰って参りました。

ストラスブール訪問

次の2週間は、アルザス地方にあるストラスブール大学手の外科です。やはり当科の斎藤朝海先生が訪問された地です。例年は-20℃くらいになるそうですが、私の滞在期間中は0℃以下の日がなかったために大変助かりました。順天堂大学から留学していた市原理司先生ご一家には仕事上のことはもちろん、生活から観光まで本当にお世話になり、大変楽しく充実した日々



●写真3

を過ごすことが出来ました。

手の外科教授・Liverneaux先生はとても教育熱心で、ヨーロッパ各国から多くのレジデントを受け入れています。またLiverneaux先生、Facca先生、Taleb先生といった3名の先生が日仏交換研修の一環として日本を訪れていらっしゃることもあり、特に日本人は非常に好意的に迎えて頂けるようです(写真5)。臨床面では外傷初めとする一般手の外科から、ダ・ビンチを使ったロボット・マイクロサージャリーまで各種の手術を拝見することができて大変勉強になりました。また私の滞在期間中に開催された末梢神経外科の勉強会では発表をさせて頂くこともでき(写真6)、大変思い出深い訪問となりました。

パリ訪問

最後の1週間は、パリのinstitute de la mainです。非常に短い期間の滞在でしたが、教授のMathoulin先生やLeqlercq先生に大変お世話になりました(写真7)。関節形成術、手関節鏡手術、腕神経叢手術など多彩な手術を拝見し、大きな刺激を受けました。こちらでも2か月に一度の勉強会で発表する機会を与えて頂き、貴重な意見交換をすることができました。またヨーロッパ各国から研修に訪れている手の外科研修医とも仲良くなり、今でもメールのやりとりを続けています。今後もこの交流を続けていきたいと思っています。



●写真4

おわりに

この6週間で日本では見ることのできない手術を幾つも拝見できました。また総じてフランス人の発想は独創的で素晴らしいものがあり、私も見習って行かねばと思いつつ帰国致しました。また複数の先生が国境なき医師団などへのボランティア活動を行っており、その奉仕の精神には頭が下がる思いでした。今回学んだことを糧に、私も一歩ずつ前に進んで参りたいと思います。



●写真5

います。

最後になりましたが、この素晴らしく実りの多い機会を与えて下さいました日仏整形外科学会の金子和夫教授はじめ役員の諸先生、快く送り出して下さった東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センターの山中寿教授、桃原茂樹教授、猪狩勝則准教授はじめ医局の諸先生、渡仏を全面的にサポートして下さいました順天堂大学整形外科学教室の諸先生に心より感謝申し上げます。有り難うございました。



●写真7



●写真6

私達の フランス 研修 4

2014年度交換研修報告

フランス留学報告

下志津病院整形外科
江口 和 先生

はじめに

私は2014年10月13日から約2ヶ月半、日仏交換研修生としてParis、Bordeauxに研修いたしましたのでご報告させていただきます。

Henri Mondor Hospital (Paris)

留学の直前に駅前留学でフランス語を習ったものの身に付かず、不安を抱えたまま、2014年10月10日、鹿児島で基礎学会の発表を終え慌ただしくパリへ向かいました。

まず10月13日から5週間、Henri Mondor Hospital(写真1)にて研修させていただきました。Paris郊外Creteilにあるパリ第12大学付属病院で病院玄関入り口前にはヘリコプターが常時待機する大病院でした。スタッフは主



●写真1 Henri Mondor Hospital

任教授のPhilippe HERNIGOU教授、脊椎部門はJerome ALLAIN教授、Alexandre POIGNARD教授、Chef de Clinique-Assistant2名、Intern3名が担当しておりました。

皆、腰椎前方固定を得意としており、滞在中に10件以上の前方固定を見ることができました(写真2)。前方、側方ともmini-openで行っておりました。例えばL3/4-L5/S1の3椎間固定は前方から同皮切で行い、L5/S1は前方、L3/4、L4/5は左斜め前方から腹部大動静脈の剥離が絶妙でした。またXLIFはちょうどOLIFのように腸腰筋前方からケージを入れるため、神経モニタリングは使用しておりませんでした。日本と異なる点は、LDR社のROI-Aというスタンドアロンケージを使用しておりL5/S1ALIF用ケージがあること、ケージから上



●写真2 Allain教授の手術風景

下椎体に楔形のアンカーを打ち込み固定するため後方 Pedicle screwが不要なこと、BMPを使用しており腸骨自家骨移植が不要なことでした。骨癒合はといいますと、約半年で始まり、1年で9割以上とのことでした。

ただ多くは椎間板性腰痛の若年者であり、日本のように高齢者の骨粗鬆症ではありませんでした。留学前にOLIFを数回経験していたので、今回の留学では前方アプローチの解剖をもう一度見る良い機会となりました。帰国後はぜひOLIFなど前方手術を抵抗無く取り入れたいと思います。各先生が脊椎に限らずTHAやTKAなどもオールラウンドにこなしており驚きました。また関節骨壊死症に対する自己骨髄幹細胞移植治療も盛んでした。両腸骨から約400ml採血後、遠心分離で約4倍濃縮して、透視下に肩、膝、股関節の骨壊死部に注入するというものでした。千葉大で行われている自己多血小板血漿療法PRP(Platelet-Rich Plasma)に通じるものがあり興味深く拝見させていただきました。

またInternとも仲良くさせていただき、フランスの医療制度について色々話を聞く事ができました。フランスでは約6,000人が大学卒業時に統一試験を受け、上位1,000人程度が内科、外科を自由に選択できるが、成績が悪いと選択肢はなくGeneral Doctorになるそうです。中でも整形外科は上位でないとは選択出来ないそうです。2年間の初期研修、約3-4年間のintern期間あり、その間1年の一般外科も必須とのことで、ようやく一人前の整形外科医になれるとのことでした。そのためか、整形外科のインターンは皆、優秀で自身に溢れておりました。

最後の1週間、11月10日からParisで仏整形外科学会

SOFCOTが開催され、同門の船橋整形病院の白土英明先生、三浦陽子先生、松戸市立病院の飯田哲先生、東千葉メディカルセンターの高澤誠先生と合流することができ、先生方から激励をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

■ NeuroSpin (MRI研究施設)

Parisに滞在中合間をぬって、MRI研究施設NeuroSpinに2日間かけて見学してきました。Parisから約1時半のSaclayというところにあります。日本の筑波の学研都市のようです。脳研究がメインとなっており非常に落ち着いた環境でした。当日はLeBihan所長(写真4 Diffusion MRIの第一人者)に直接施設をご案内いただきました。人用：3T, 7T, 11.7T、動物用：3T, 7T, 11.7T, 17.65TのMRIがあり、世界屈指の研究が行われておりました(写真3)。また私がこれまで行ってきたMRI研究をプレゼンする機会が与えられました。幸いにも日本から研究者である釣木澤朋和先生が留学中(写真4 Diffusion MRIをご研究中)であり、大変に助けていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。今後のコラボレーションなど具体的なディスカッションできとても有意義でした。

■ Pellegrin Hospital (Bordeaux)

11月16日、TGVでParisからBordeauxに移動しました。BordeauxはParisの喧噪と打って変わってガロンヌ川に抱かれ古典様式の石造りの建築物が立ち並ぶとても落

ち着いた街です(写真5)。11月17日から5週間、Pellegrin Hospital(写真6)にて研修させていただきました。Bordeaux第2大学付属病院でBordeaux最大の病院です。整形外科に2つの脊椎外科教室があり、私がお世話になった第1脊椎外科の主任教授はJean-Marc VITAL教授であり、Olivier GILLE教授、Vincent PONTILLART教授、Dr. Ibrahim OBEID、Chef de Clinique-Assistant 5名、Intern 5名が担当しております。もう一つの第2脊椎外科は今年のEuroSpineの会長をされたJean-Charles LE-HUEC教授が主任教授をされております。南西フランスにおける最大のSpine centerとなっており、月から金まで朝から基本縦2列で一日8件前後の脊椎手術をこなしておりました。VITAL教授は解剖学教授も併任されており、Cadavorを使った研究等も行われていました。

私の留学中に日本から京都大の竹本充先生(昨年9月から2年間)、三楽病院の中尾祐介先生(今年9月から11月まで)、岡山大の荒瀧慎也先生(今年10月から11月まで)の各先生が御留学中で一緒に食事をしたり、竹本先生のお家に招待していただいたり家族ぐるみで大変お世話になりました。また荒瀧先生にはパリでも1週間程滞在が重なりお互いに單身だったため毎日のようにお世話になりました。皆自分と同世代ですが、非常に優秀でとてもいい刺激を受けました。この場をお借りして感謝申し上げます。他にもチリ、カメルーン、スペイン、アルジェリア、中国、インドなど世界各国から多数留学されておりました。

VITAL教授(写真7中央)は、手術が終わるとC'est parfait! (完璧!)を口癖とされ、ラテン系のとても陽気でダンディーな先生で誰からも好かれる人格者でした。また

Modic type1には固定術をされており、その根拠は同門の豊根先生、大鳥先生のpaperを参考にしているとのことでした。またご一緒した竹本先生はVITAL教授をはじめ全員からの信頼が絶大で、教授の患者さんの手術を任せられ右腕となっておりました。皆が日本のspine surgeonの真面目さ、レベルの高さを認めており、私も諸先生方の恩恵を享受でき、おかげでどんな手術にも快く入らせていただきました。

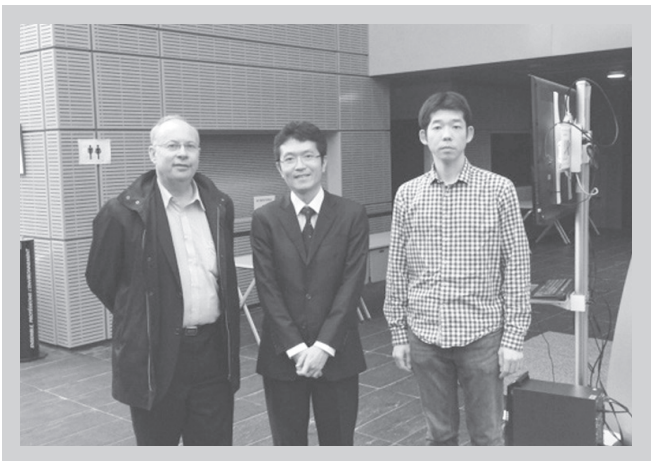
また週1回、プライベート病院でDr. OBEID(写真8)による成人脊柱変性(ASD)の手術を見学する機会を得ました。Dr.OBEIDは今年、浜松で開催された日本脊椎インストゥルメンテーション学会にも招待講演に来ており、ASD関連のpaperを沢山書いている脊柱変形手術のスペシャリストです。手術中は獲物を狙う鷹のように眼光鋭くどんな困難な状況にも妥協を許さず、しかも状況判断が早く淡々と立ち向かう姿に圧倒されました。しかも私より若干年が若いことにさらに驚かされました。消毒やドレーピン、閉創前のイソジン液消毒(移植骨もイソジン漬け)、最後にバンコマイシ



●写真6



●写真3



●写真4



●写真5



●写真7 スタッフと記念撮影

私達の フランス 研修

5

2014年度『フランス手の外科道』研修記

関東労災病院整形外科
深澤克康先生

ン粉末散布等、準備から終刃まで細部まで徹底的にこだわ
り抜いておりました。Th8骨盤固定、Osteotomyを含め3～
4時間位でこなしておりました。手術は神経モニタリング
下に行い、MISにこだわらず止血や展開をしっかりと行い、
イメージを使わず素早くスクリューを刺入します。ロッ
ドは胸腰椎移行部や骨切り部にドミノで連結し上手く力
を分散させるなど工夫しておりました。必ず術前に全
症例にEOS(立位全脊柱レントゲン)を撮りSpino-pelvic
sagittal balanceを考慮して、適切な腰椎lordosis獲得を考
えて計画的に手術しておりました。SPO (Smith-Petersen
osteotomy), PSO (pedicle subtraction osteotomy) などの手
技もしっかり動画を撮りながらじっくり観察ができ目か
ら鱗の連続でした。ただフランス人は骨質が硬く、果た
して日本人高齢者の骨粗鬆症では再考が必要と思いました。

フランスについて

仏語は世界一美しい言語と言われておりますが、流
れるように美しくお洒落で魅力的でした。初対面でも
必ずBonjourと挨拶するのがマナーで見習うべき習慣
でした。日本では控えめで協調性が美德とされ沈黙は
金なりという格言がありますがフランスでは皆無であ
り、自己主張をすることは大切なようで、カンファヤ
オベ室、カフェでも議論が尽きませんでした。

Paris滞在中は週末には近郊の町やブルゴーニュ地方
を旅することができました(写真9)。またロワールに
ある晩年のレオナルド・ダ・ヴィンチが過ごしたル・
クロ・リュセという館に行ってきました。イタリア人

の天才ダ・ヴィンチに心酔したフランソワ1世から与
えられた館で彼は1519年亡くなり、この頃からフラン
スにルネッサンスが開きました。フランスの医療に
おいても日本にはないインプラントを積極的に使う等、
自由な発想で良いものをどんどん取り入れる姿勢を感
じました。

謝辞

今回の留学で学んだことは限りなく、ある程度で満
足していた自分には深く考え今後の課題を再認識する
良い機会となりました。また日仏交換留学を通じて日
本だけでなく世界に多くの偉大な師や友人を得たこと
が最大の宝かと存じます。

今回の仏留学を全面的にバックアップくださった松
戸市立病院の飯田哲先生に深く御礼申し上げます。ま
た今回の留学を快諾くださいました千葉大学整形外科
の高橋和久教授、大島精司先生、留守中に大変ご迷惑
をおかけした下志津病院の山中一先生、玉井浩先生、
鈴木宗貴先生、小林達也先生に深謝いたします。今回
単身での留学でしたが、送り出してくれた家族に心よ
り感謝いたします。さらにこのような素晴らしい機会
を与えてくださった日仏整形外科学会の世話人の諸先
生方ならびに受け入れてくださったHERNIGOU教授、
VITAL教授に重ねて御礼申し上げます。

今回の経験を糧に日仏整形外科の発展のために微力
ながら精進する所存です。今後とも先生方のご指導・
ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

はじめに

5年前、ベルギーの学会でお会いしたStrasbourg大学
のPr. Liverneauxのバイタリティーに衝撃を受けて以来、
フランスでの臨床留学に憧れを持っていました。本年、
念願のtravelling fellowに選出して頂き、2014年の9月
から12月にかけて単身渡仏してまいりました。

私は手の外科およびMicrosurgeryを専門としてい
るため、パリ、ナンシー、カーン、ストラスブール、
ボルドーの5施設で活躍されている手の外科医を訪
問し、最後にフランス手の外科学会に参加し帰国の途
に就きました。医局の壁を超えて身に余るご推薦、
ご助言をいただいた順天堂大学山内裕雄名誉教授、
金子和夫教授、そして杏雲堂病院の富田善雅先生に
は厚くお礼を申し上げます。また昨年の秋からfellow
として渡仏されている、順天堂大学の市原聡先生に
はストラスブールおよび学会参加中のパリでの滞在
時において、本年のfellowである滋賀医科大学の児玉
成人先生にはパリ、ナンシーとともに研修し、大変
お世話になりました。また昨年すでに渡仏された慶
応大学の越智健介先生からはトラムのチケットとと
もに新鮮な現地情報を教えて頂きました。今回、『手
の外科道』を歩まれた尊敬する日仏の諸先輩、志し
を共有できる素晴らしい同世代の日仏の先生たちと
の出会いは、留学経験と同等、あるいはそれ以上の
刺激的な、そしてとても貴重な私の財産であると感じ
ています。

L'Institute de la Main (Paris)

10日間訪問したClinique JouvenetのL'Institute de
la Mainはフランス手の外科の名医たちが集う、“手
の外科のリアルマドリッド”ともいうべき病院です。
それぞれの先生の治療哲学のもと、実に様々な手術
が行われており、訪問中も様々な国より多くの見学
者が訪れていました。特にMathoulin先生の関節鏡手
技は大変見事でした。渡仏初日、入念に用意したプ
リペイド式SIMカード(Le French Mobileというフラ
ンスの携帯電話サービス会社のものは日本語サービ
スがあり事前に日本に郵送してくれます)を自宅の机
の上に置き忘れてしまい、大変落胆しました。しか
し児玉先生が数日後に渡仏することを思い出し、自
宅の妻に急遽連絡し、お会いしたこともない先生に
電話でお願いし、郵送させて頂きました。パリの
George V駅の前で児玉先生に出会い、カードを受け
取った時は大変感激し、この時の喜びはその後ご一
緒に食べた美味しいムール貝とビールの味をさらに
格別なものとししました。3日間は児玉先生とともに研
修し、お互いにおじさん同士でしたの午後には疲
れを癒やしに街に出て、ビールを飲みながら手の外
科談義に花を咲かせました。Mathoulin先生から頂い
た本は、きっちりとサインを書いてもらい大切に保
管しています。



●写真8 手術室にてDr.Obeid（左から2人目）、竹本先生（右端）



●写真9 パリ近郊の景色

Le Centre Chirurgical Emile Galle (Nancy)

パリから西へTGVにて1時間、ロレーヌ地方のNancyに移動し、Centre Chirurgical Emile Galle病院で1か月の研修を受けました。ここは手の外科と一般整形外科に特化した病院ですが、手の外科は最もメインとなる科として、2人の教授と20人近いメンバーが所属していました。6つの手の外科専用の手術室を使い、毎日午前10時に20件の予定手術、午後1時に10件程度の救急手術を行っていました。救急外傷が来ると写真を一斉メールでスタッフに送るので、すぐに状況が伝わり、治療方針も決まることは良いシステムです。手根骨不安定症



●L'Institute de la MainにてDr.Mathoulin、他国の見学者の先生とともに

による変形やデュプイトラン拘縮など人種の違いを感じさせる症例が多く、近位列切除や注射針による腱膜切離術など日本では馴染みの少ない手術にも参加しました。またフランス発の人工CM関節置換術も患者さんの満足度が高く、大変良い成績でした。麻痺手に関しては、課題は多いようですが選択的神経切除術も積極的に行っていました。ボスのDautel教授は大変手術の上手な先生であり、手術中にゆっくりと説明してくれるのですが、無駄のない動きのために手術は実に早く終わります。火曜日にはこども病院での診療、手術をされており、こちらへも訪問して分娩麻痺と母指多指症の手術を拝見しました。生活面は施設内の別棟の部屋(当直室?)を手配していただき、寝泊まりしま



●Nancy：夜間の緊急手術後、インターンたちとともに（後ろの時計では23：09！）



●Nancy：フランス手の外科学会の学術集会の会長を務めたPr.Dautelとともに

した。用意して頂いたICカードにより自由に施設内を見学でき、これを用いて職員食堂でのバイキング形式の朝食食がフリーとなり、大変助かりました。清潔でシャワーもあり、WIFIも使用できる快適な部屋でしたが、冷蔵庫とキッチンがないため夕食はすべて外食としていました。会長をされた手関節外科セミナーに招待して頂き、私自身、cadaverを用いた実技は初めての経験であり、大変教育効果が高いことがわかりました。また日本で執刀したマイクロ手術症例をプレゼンテーションしたことや、インターンの先生と協力しながら夜遅くまで行った、挫滅切断指外傷の緊急手術は思い出深いものとなりました。週末にはナンシーの町を散策しました。小さい町ですが、スタイラス広場やアールヌーヴォー調の美しい建物が多く、個人的にはとても気に入りました。Parisとは異なり市内では英語が通じないことが多く大変でしたが、日本で語学学校に通った成果を発揮すべく奮闘しました。

Chirurgie de la main et du poignet HP Saint Martin (Caen)

フランス北西部のノルマンディー地方は、古くは海を渡ってきたノルマン人に与えられたフランス領土としての歴史があり、Caenは第2次世界大戦における史上最大の作戦といわれたノルマンディー上陸作戦の舞台となった、この地方最大の都市です。ここでは私立病院であるSaint Martin病院の手の外科医



●Caen：Dr. Dupuytrenの銅像をもつ陽気なDr.Apard

として勤務するThomas APARD先生を1週間、訪ねました。APARD先生は数年前に日仏整形外科学会の交換留学生として日本を訪問された大のまんが好き、日本好きの先生です。超音波検査に関して、フランス手の外科での第一人者として活躍する新進気鋭の手の外科医であり、実際に超音波装置を用いた手根管解放術を拝見しましたが、小皮切でありながら安全なよい手法でした。あらゆることを一人で切り盛りしているのですが、手術予定、紹介状と連携した個人用の電子カルテシステムを開発したり患者説明のための漫画を依頼して作成したりしてクリエイティブに環境を作り上げている姿は、私と同世代ながら逞しく輝いて見えました。カーン滞在中はご自宅に宿泊させて頂きました。奥さんや先生の手料理を食べながら日本で過ごした思い出話や子育て論を語り合い、高級レストランに誘ってくれたり、ドライブに連れて行ってもらったりと本当にお世話になりました。

Les Hopitaux Universitaires de Strasbourg (Strasbourg)

1ヶ月間、Strasbourg大学手の外科のLiverneaux教授にお世話になりました。大変情熱的な先生であり、毎朝のカンファランスでは前日のすべての手術と救急患者を議論し、週に2回の手術と3回の外来を精力的にこなしていました。新しいことに貪欲に取り組み、国内



●Strasbourg：ダビンチ講習会（RAMSESS seminar）で糸こんにゃくの縫合練習

外の学会に積極的に参加、空いた時間に論文、発表指導を行うその立ち振舞いは刺激的であり、日々の自分の努力不足を痛感しました。私の訪問初日もアメリカの学会に参加して不在でしたが、帰国翌日から8件もの手術をこともなげに行っていました。滞在期間中に2つの講習会(ダ・ビンチを用いたマイクロサージャリー講習会と手関節鏡のアドバンスセミナー)を会長として主催され、教授の御厚意にて参加させて頂きました。2日間のダ・ビンチ講習会では、実際にじっくりと使用して操作する機会を頂き、制約やラーニングカーブが存在するもののマイクロサージャリーが可能であることを理解しました。教授宅の晩餐会にご招待頂き、最後には教授の書かれたTelemicrosurgeryの本とともにダ・ビンチ手術の認定証を頂きました。経済性や操作性に関してはまだ克服すべき課題はありますが、今後期待できる機器であり、注目していきたいと思いました。アパートでの生活は実に快適でしたが、自炊に関しては独身時代以来であり、妻のありがたみを痛感しました。また体力維持のためスニーカーを買ってジョギングも始めました。昨年から滞在している市原先生には初日の出迎えから日々のアパート生活をサポートしてもらい、週末には車で観光へ連れて行ってもらい、奥様の美味しい手料理や先生自身の男料理を御試走して頂いたり、コルマー、カイゼルバーグ、すぐとなりの街であるドイツのケールなどを訪れ、アルザス地方のおいしい食事を堪能したりしました。とくにクリスマスマーケットの時期と重なり、華やかな

ライトアップのもと、ホットワインに舌鼓を打ちながら店先に並んだ品々を見て散策したことはとても楽しい思い出です。

Centre Hospitalier Universitaire de Bordeaux (Bordeaux)

移動1週間前、日本で予約していたアパートからクレジットカードがキャンセルされたと突然の連絡があった時は参りました。確約書があることも伝えましたが、フランスの洗礼を浴びました。ストラスブールからのTGVでの移動は、乗り換えなしの6時間、パンとお菓子を買込み、車窓を楽しみながら、読書と居眠りをしている間に着いてしまいました。ここでは、形成外科として手の外科を行っているBordeaux大学を3週間、訪問しました。教授のPelissier先生は50歳の若い教授で、“気軽にファーストネームで呼び合おう”と声をかけて頂き、いつも昼食をご一緒させてもらいました。またご自宅で教授の手料理をご家族と頂き楽しい時間を過ごしました。新しいことを積極的に行うというよりも確実な治療をしているという印象の手術が多く、女医さんが多いためか、手術室はいつも明るい雰囲気でした。南仏は基本的に明るく、おおらかな国民が多いためか、それとも医療事情のためか、患者さんの創管理が悪かったり、ひどい状態となるまで来院しなかったりする症例が気になりました。この大学の形成外科では手の外科の他にも熱傷、美容形成を扱

っており、手の外科以外にも乳房プロテーゼ、脂肪吸引、腹部の脂肪と皮膚を切除する腹部形成など(性転換手術までも!)を見学、これも異文化交流!ためになります。また頭頸部の形成外科は別な科として独立していますが、教授の御厚意により紹介して頂いて、下顎癌による切除後骨欠損に対する血管柄つき腓骨移植術を見学させて頂きました。2チームで構成された手術は手際よく、よいシステムができていて感じました。

Le Congrès de la Société Française de Chirurgie de la Main- GEM 2014 (Paris)

パリに戻って参加した手の外科学会学術集会では、ビデオセッションや若手とベテランの討論企画、企業ブースでの美味しい軽食などを楽しみました。発表はスライドのデザインセンスがよく、プレゼンテーションが上手な印象を持ちました。訪問した施設でお世話になったスタッフとの再会はとても楽しく、お土産を頂いたりお渡ししたりして、帰国直前ということもあり感慨深く感じながら帰国の途に着きました。

渡仏前、折に触れて様々な先生にアドバイスを頂きながら半年の歳月をかけて、訪問施設を探しました。宿泊施設の確保を含めて準備は大変であり、多くの不安要素を残しての出発となりました。しかし多数の施設を訪問することにより、フランスの手の外科と云えども決して画一的ではなく、それぞれの医師がそれぞれの治療哲学とプライドを持って診療にあたっている姿を実際に見ることができたことは貴重な経験となりました。自由で豊かな発想や新しいことに対する実践力、他国からの訪問者に対する懐の深さ、そしてフォアグラや様々なチーズ、ワインと様々な美味しい食文化も相まって、私はすっかり『フランス学派』のファンとなりました。またフランスのどの地域でも丁重な待遇を受けたことは、日本人であることに誇りと先人の偉大さを痛感し、後に続く世代を応援していかねばならないと思いました。

最後にこのような素晴らしい経験をさせて頂くことができ、会長をはじめ日仏整形外科学会役員の諸先生、アドバイザーとして助言いただいた順天堂大学の本間先生、ありがとうございました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。



●Bordeaux：とてもフレンドリーなPr. Pelissierと



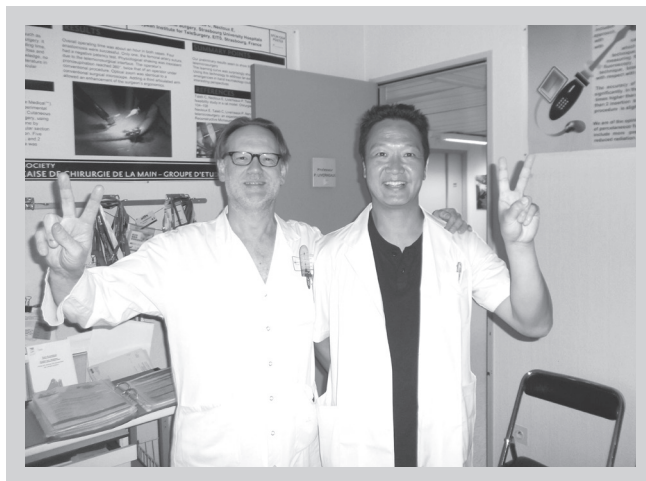
●Strasbourg：愛らしい看護師Murielさんと尊敬するPr. Liverneux

日仏整形外科交換研修帰朝報告

滋賀医科大学整形外科
児玉成人先生

今回、手外科施設としてストラスブール大学、パリのClinic Jouvenet, institute de la MainとNancyのCentre Chirurgical Emile Galle, パリのCochin大学では骨軟部腫瘍を研修させていただきました。当初、春から3ヵ月あるいは秋から3ヵ月研修させていただく予定でしたが、大学業務の関係で、1か月半ずつ2回に分けて回ることになりました。1回目は5月中旬から6月末までストラスブール大学のhand surgery、リベルノ教授のもと研修させていただきました。ストラスブールで約4週間研修し、そのままパリでFESSH(欧州手外科合同会議)に学会参加、発表をして帰国するというプランを立てました。関西空港からフランクフルト空港で降り、そこからバスで約2時間半の旅、それが留学の始まりでした。留学前はフランス語を勉強しようと京都

で習い始めましたが(滋賀県にはフランス語教室がなかった)、仕事が忙しく、1か月で挫折してしまいました。フランス生活はどうなることかと、不安でいっぱいでしたが、それを救ってくれたのは市原先生との出会いでした。市原先生は順天堂大学整形外科の手外科医で、私が渡仏する半年以上も前からリベルノ教授のもとに留学されていました。事前からメールでやりとりし、向こうの生活でわからないことをいろいろ聞くことができました。これはフランスのことがまったくわからない私にとっては本当に助かりました。フランクフルト空港からバスでストラスブールに着くのは夜の11時半ごろで、市原先生に迎えに来ていただきました。もし市原先生がいなかったら、夜のまったく知らない町をスーツケース2つ携え、ホテルまで行



●リベルノ教授(ストラスブール大学)と。リベルノ先生は何も着ず、じかに白衣を着られます。これがまた似合います！



●ストラスブール大学手外科若手医師たち、市原先生とレストランで

かなければと考えると、本当にたどり着けたかとぞっとします。ホテルはストラスブール中心街から少し離れた長期滞在型のホテルで、病院から徒歩10分という非常に研修には立地がいい所でした。そこで月曜日から金曜日まで研修、土日は観光と本当に充実したストラスブール生活でした。ストラスブール大学での研修について述べさせていただきます。リベルノ教授は本当に親日家で、面倒見のいい先生でした。レジデントには非常に厳しい先生でしたが、我々日本からの留学生には本当に優しく、私の質問にも丹念に答えてくださいました。ざっと研修内容を紹介します。リベルノ先生のOP日は月水でいたい、昼の1時くらいには終わってしまいます。その間に8,9件の手術をこなされます。私が研修している間も、1件に1時間以上かかる手術はほとんど見たことがありませんでした。手術内容は手根管症候群が本当に多く、他は橈骨遠位端骨折やデュピイトレン拘縮など多岐にわたり、手外科一般の手術が主です。しかし、本当に手術が早いことに感銘を受けました。また、小皮切にもこだわりを持っておられ、橈骨遠位端骨折のロッキングプレートは1.5 cmの皮切(これは論文にもなっています)、手根管も1.5cmの皮切で約5分、肘部管症候群は3cmの皮切で約15分と、日本の常識では少し考えがたいスピーディーな手術でした。火曜日、木曜日はリベルノ先生の外来に一日ついていました。患者さんとは当然フランス語で話をされるので、何を言っているのかさっぱりわかりませんでしたが、必ず、毎回私には英語で説明してください



●Clinic Jouvenet, institute de la Main のMathoulin先生と。Mathoulin先生は歌が大好きです！

ました。彼の手術のモットーは常にsimple is the bestで、チャレンジングで時間のかかる手術はせず、確実に傷は小さく、時間のかからない手術、これがbestな治療法だとおっしゃっていました。一度プライザー病の患者さんが来たとき、これを君ならどう治療すると質問されました。私は即座に血管柄付き骨移植をすると答えましたが、リベルノ先生は、血管柄付き骨移植は成績が安定していないし、社会復帰までに時間がかかる、この患者は早期の仕事復帰を希望しているので、proximal row carpectomyをしておっしゃっていました。治療に対する考え方も含め、これから私が治療をしていく中で勉強させられることが多かったです。後、日本でも取り入れたいと思ったのがprosthesisでした。リベルノ先生はprosthesisをいくつか開発されており、結構いいかもと思われるwristのprosthesisもありました。それから私が最も印象に残っているのはダヴィンチを使ったロボット手術でした。月に2回くらい、金曜日に行っていました。私が研修していた時はちょうど、肋間神経移行の肋間神経の剥離を胸腔鏡下にダヴィンチで採取するという画期的な方法でした。この手術には非常に感心させられました。日本でも胸腔鏡下の肋間神経剥離は報告がありますが、これにダヴィンチを使うと、非常にアームの自由度が高いので、剥離しや



●institute de la Main のLeclercq先生と。私より年上だと思いますが、年齢は聞けませんでした

すい利点があります。また、傷も通常の肋間神経移行よりはきわめて小さく済むので、非常にいい方法だと思いました。他にも神経縫合や他の神経剥離に使われていましたが、この辺の手技はまだ残念ながら、マイクロサージャンの手技に劣るという印象でした。しかし、近い将来整形外科でもこのロボット手術は普及する可能性を抱かせるものでした。リベルノ先生が親日家ということもあって、他のスタッフの先生方も非常にフレンドリーに接してくださいました。市原先生もいてくださったので、何回か一緒にご飯も食べたりできて、楽しい一時を過ごさせていただきました。市原先生には感謝の言葉しかありません。何も知らない土地でストレスなく過ごせたのは市原先生がいてくれたからです。ストラスブール大学の研修、土日は頻回に観光に連れて行ってくださり、この場を借りて、深謝の言葉を述べさせていただきます。

2回目は9月後半から11月初めまでパリの病院を中心に研修させていただきました。先ず最初の2週間はClinic Jouvenet, Institute de la Mainに行きました。Mathoulin先生にコンタクトを取り、手関節鏡を中心に見学しました。ここでは、数日でしたが、同じ日仏研修で訪問されていた関東労災病院の深沢先生とご一緒させていただきました。この病院はパリの高級住宅街16区にあるプライベートの病院で、ベテランの先生が6, 7人いて、それぞれの先生がエキスパートという感じでした。常にレジデントの先生やvisitorの先生がおられ、日本でいうと新潟外科研究所のような、そ

んな病院でした。Mathoulin先生の手関節鏡は本当に早く上手で、SL靱帯の修復は鏡視下で30分くらい、TFCCの修復もそれくらいの時間でされていました。舟状骨偽関節も鏡視下で、1時間弱で行っておられました。ポータルの作成が本当に的確で非常に感銘を受けました。また、この病院にはGilbert先生、“我々マイクロサージャンならおそらくみんな持っているAn Atlas of Flaps of the Musculoskeletal Systemの著者”、がいらっしゃいました。ちょうど分娩麻痺の子供の広背筋移行をされる予定だったので、興味深く見せていただきました。術後、会話をしていただき、少し緊張したことを覚えています。他にもLeclercq先生という女医さんもおられました。この先生は非常に日本的な丁寧できれいなOPをされる先生で、私が訪問していた時も第2足趾移植も行っておられました。マイクロの血管吻合も非常に的確で上手でした。実は私の訪問最終日に27歳女性の橈骨遠位端GCTの治療について相談を受けました。GCTのaggressiveなタイプで著明な関節破壊があり、私も初めて見るような画像でした。おそらく私がCVに専門分野として腫瘍も書いていたので、相談してこられたのだと思います。日本ではこれに対し、どんな治療をするのか質問をうけたため、私なら、手根骨が残せるなら、血管柄付き腓骨頭移植、手根骨が残せないなら、血管柄付き腓骨移植による関節固定をすると説明しました。すると、10月30日にOPをするので、一緒にOPに入ってほしいと依頼がありました。後日メールでも、OPにinviteしたいと依頼

がありました。私はその時はすでにコシャン病院に行っていて、Institute de la Mainにいる予定はなかったのですが、せっかく依頼され名誉なことでもあるので快諾し、OPに入ることにしました。OP当日は非常に緊張しました。詳細は割愛しますが、インターン数人、他国からのvisitorも数人おり、多数のギャラリーの中でLeclercq先生にアドバイスしながら一緒にOPをさせていただきました。OPが終わったときはほっとしたのと同時に非常に満足感を味わったことを覚えています。

Institute de la Mainの後はコシャン病院で骨軟部腫瘍を研修させていただきました。コシャン病院は非常に大きな病院で、整形外科は外傷、関節班、骨軟部班に分かれます。私はAnract教授にコンタクトをとり、お世話をしていただきました。OPの見学を中心に、骨軟部カンファレンスにも参加させていただきました。症例は悪性骨軟部腫瘍が週に3,4件で後は良性腫瘍が数件でした。手術内容はほぼ日本と変わりませんでしたが、やや組織の取り扱いがtraumaticで特に神経・血管の扱いはお世辞にもうまいとは言えませんでした。後、再建も骨腫瘍はほとんどが人工関節で、処理骨による骨温存や組織移植はなく、軟部腫瘍においても組織再建はほとんどないようでした。腫瘍カンファは毎週火曜日5時から2,3時間あり、放射線医や腫瘍内科医、病理医、コメディカルが一同に会し、discussionするといった非常に濃厚なカンファで、フランス語でほとんど意味はわかりませんでしたが、非常に面白かったです。Anract先生には非常によくしていただき、最終日にはワ

インもプレゼントしてくださり、非常に感激しました。また、コシャン病院にいる間数日ですが、Nancyに行ってきました。Nancyには同じfellowで渡仏中の深沢先生がおられたので、そのCentre Chirurgial Emile Galle病院を訪問することができました。ここはhandに特化した病院で、教授はDautel先生といい、非常にもの静かな紳士でした。非常に丁寧なOPをされ非常に勉強になりました。夜はスタイラス広場近くで、深沢先生と夕食を共にすることができました。ちょうど、訪問中にemergencyで切断肢があり、深沢先生とともにOPに入ることができて幸運でした。

あっという間の3ヵ月でしたが、非常に有意義な時間を過ごさせていただきました。日仏研修を通して本当に貴重な経験ができたこと喜んでおります。フランス整形外科の医療レベルは非常に高く、日本に生かせるものもたくさんありました。しかし、日本の医療レベルはそれ以上といっても過言ではありません。日本人のOPの技術レベルは非常に高いのだと実感しました。我々ほもっと世界に向けてこの技術を発信していかなければならないと痛感しました。

昨年、日仏整形外科の交流発展に長年ご尽力いただいた、我々滋賀医大の名誉教授の七川先生がお亡くなりになりました。私の面接にも面接官としておいでになられ、お出会いするのはそれが最後になってしまいました。私は日仏整形外科の交流の発展にこれからも携わってほしいというメッセージをいただいたと感じております。この貴重な経験を生かし、今後の日仏整形外科の交流と発展に微力ながら尽力していきたいと思っています。今後、日仏の整形外科がお互いに切磋琢磨し、より発展していくために、私自身も研鑽を積んで日々医療の向上に精進していきたいと思います。最後になりましたが、今回の日仏研修にあたりご尽力いただいた、会長の小林先生をはじめ関係者各位、大橋先生、藤原先生、本間先生にこの場をお借りして、深謝いたします。



●institute de la MainでのGCTのOP参加時。カメラ目線ですいません。



●あのflap surgeryのGilbert先生と



●写真7 コシャン病院 Anract教授と、ワインおいしかったです！

フランス整形外科を訪ねて

大阪医科大学整形外科
大槻周平先生

皆さんは、フランスに対してどういったイメージをお持ちでしょうか？気難しく頑固でこだわりのあるややこしめの性格。女性はおしゃれだが気位が高く鼻にかかった感じ、でも、歴史があり少し日本とも似ているような。。。

2013年6月、日仏整形外科合同会議が京都で行われました。そこで、日仏整形外科学会書記をされている藤原憲太先生からの勧めもあり発表を行いました。内容は膝蓋骨不安定症に対する手術療法でした。じつは、この膝蓋骨周辺の領域はリヨンのTrillat先生をはじめとして多くのフランス整形外科医が100年以上前から病態や手術を報告された領域でいわばフランス人こだわりの分野です。発表直前に藤原先生から「ちょっとややこしい質問されるかもね(ニヤリ)。」的なアドバイスを受けましたが、その後は、フランス整形外科の重鎮から「なぜ私が発表した測定法を用いて報告しない？(Caton先生)」などご指導を受けた事は言うまでもありません。変な汗をかきながらもなんとかきりぬけ、同じリヨンから来られた座長のNeyret先生とお話する機会もあり、見学させていただく流れとなっていました。今から思えば、私に発表すめたときからこうなるとわかってたんですね、藤原先生？

日仏整形外科交換研修制度に応募して2014年4月からフランスへ訪問することとなりました。この研修制度は訪問先および、期間(最大3ヵ月)は自分でアレンジできます。私の訪問先は、リヨンはもちろんとして膝関節鏡を用いた半月板(meniscus)縫合や靱帯再建にも興味がありますので、「The Meniscus」の著者Beaufils先

生にコンタクトをとってパリのベルサイユ病院を訪問する事としました。ちょうど渡仏を予定していた頃に、私が大学院生時代からはじめた軟骨研究の主な学会であるOARSI(国際関節病学会)もパリで開催されましたので、その時期を挟むように予定を立てました。余談ですが、この研修に参加しようと思ったときは一人で行く予定だったのですが、妻に報告したところ「わかった、パリ、行くわ!」と言われました。あれ、2歳半の息子と5ヵ月の娘(話したときはまだ生後間無し!)連れて行くってこと???ひとりでもふらりと行こうかと思っていたのに、これでは移動手段も何もかも計画を立て直さなければ。。。きっと娘は全く覚えてなくても、息子はちょっと覚えてくれていて、将来国際的に育ってくれるための先行投資だ!などなど自分に言い聞かせて、準備をすすめることとしました。

Prof. Philippe Beaufils

ようやく、フランス整形外科のお話です。

まず一つ目の訪問先病院はベルサイユ病院です。パリの中心地から車で30分程の離れた郊外にある病院で、まさに、ベルサイユ宮殿の近くです。Beaufils先生からは到着の翌朝8時に病院7階の自分の部屋に来るようにとメールで言われていたのでフランス語のしゃべれない私はDr. Beaufils? Orthopaedic?など病院内で連呼しながら親切なフランス人に案内されて到着できました。あれ、思ったよりみんな優しいぞ!そうか、「流暢な英語より、つたないフランス語の方が喜ばれる!」

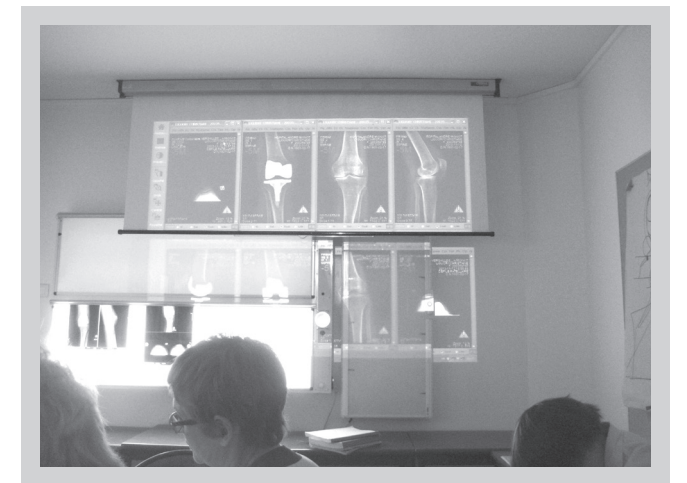
という友人のアドバイス通りでした。到着して、Beaufils先生とは初対面だったのですが、訪問を大変喜んでいただきました。しかしながら、先生は62歳で30年くらいこの病院で働いておられますが、しばらく滞在するような日本からの訪問は私をはじめでらしく、「なんで君はこの病院を選んだんだい?」というのが最初の質問でした。即座に彼の著書「The Meniscus」を見せて、勉強しにきた事を伝え、ニコッとされ、日本からの珍訪問者?に納得されたようです。

病院は毎朝8時からカンファレンス。金曜日はBig meeting dayで来週の予定手術を一通り検討します(約2時間)。その他の日は前日に救急で運ばれた症例および緊急手術の報告などでした(約30分)。私はBeaufils先生の隣にいつも座り、症例ごとに君ならどうする?と聞

かれましたので、気が抜けず結構疲れました。8割くらいは治療方針が日本と同じでした。膝に関しては、人工関節単顆置換術の適応が広く、脛骨骨切り術の適応が狭い印象でした。カンファレンスはもちろんフランス語ですが、金曜だけは私のために英語で皆さんがプレゼンをしてくれました。いつもカンファレンス後にはcafé timeがあるのですが、そこでfellow達から、お前が来たから英語の準備でこっちは大変やぞーなんて、冗談で言われたりしましたが。また、金曜のカンファレンス後は、私のためにBeaufils先生は半月板縫合術の適応とその手術成績、人工半月板治療の短期成績など学生も交えて講義してくださいました。そのなかで、半月板縫合は50歳くらいまでが適応と言われましたので、「先生ご自身がもし運動中に半月板損傷を起こしたら、



●Dr. Beaufilsと



●Versailles hospital カンファレンス風景



●Dr. Aliと



●fellowたちと



私は先生の半月板を部分切除したらでいいですね？」と冗談半分で質問したら、変性の程度にもよるが基本的には縫合してくれと言っておられました(笑)。

手術は3部屋を使って毎日朝8時半すぎからスタートでした。週に50件、年間3,000件くらい行っているようです。午前は、医学部生(4年)が手術に優先して入るので外からの見学でしたが、午後からは、手洗いをして関節鏡やTHAなど普通に介助させてもらえました(最後の方は、けっこう症例数が多くてお腹いっぱい状態でした)。Dr. Ali(若手整形外科医)が最初の1週間いろいろと教えてくれたおかげで、すぐにとけ込む事ができ、学生、interne, fellowなどさまざまな段階の医師との交流も非常に興味深いものでした。我々の大学では学生はある意味お客さんですが、フランスでは十分な戦力です。学生と二人で手術する事や、外来の手伝いなど当たり前です。その流れで、遅い昼食を共にし、他の先生との交流も自然な流れで整形外科を感じる事ができていると感じました。学生さんには大変かもしれませんが、整形外科入局を身近に感じてもらうためにはいい事かなとおもいました。昼食時にワイン、ビールなどは自己責任でたしなまれてました(笑)。私は。。。内緒です。今から思えば、はじめての日本からの訪問者としてかなり皆さんに良くしてもらったと感じました。

■■■ OARSI meeting

私は、大学院4年生からアメリカのSan Diegoに留学し、軟骨の研究をしていました。それ以来、この学会には発表も含めて毎年参加しています。現在は臨床中心の生活ですが、大学院生の研究指導もしております。留学中の友人や指導くださったMartin教授とも旧交を温める事ができました。今後も基礎研究の結果を臨床へ少しでも移行できるよう、これからも頑張っていこうと感じた期間でした。

■■■ リヨンへ

パリからリヨンまでは約500kmあります。フランスと言えばTGV(高速鉄道)で約2時間らしいのですが、われわれは荷物の多い家族4人です。レンタカーでの移動となりました。またまた余談ですが、フランスの

高速道路システムは非常に難しいです。有人のゲートがあれば、そこに飛び込むのですが、10以上ゲートがあったりする中、なかなか有人か無人かを遠くからでは見分けが付き難いです。そこで、クレジットカードで支払いができるゲートを次ぎに選択する(現金支払いのゲートは数が少ない)のですが、日本から持参のVISA, JCBカードなどは2、3回使えませんでした(時々使える事もあるので、その判断が厄介です)。最初はゲート前で渋滞を引き起こしパニックになりましたが、2回目からは、ヤバいと感じたらすぐにハザードランプを付けて、(俺の後には来るなよ。)と注意を促しておけば、もし1つ目で通れなくてもバックして隣へ移動する術を身につけました。きっと違法ですけどね。そうこうしながら、ドライブインなどもちょっと楽しむ事を覚えて、5時間かけてリヨンへ到着しました。中心街の一方通行の多さに閉口しました。ホテルが見えているのに、結局ホテルの駐車場にたどり着けず、近くのパーキングから多くの荷物を降ろすはめに。。。洒落たショーウィンドーのポスターからは俳優ジョージクルーニーが男前に微笑みかけているのに、こちらは汗びっしょりで駐車場とホテルを大きい荷物を抱えて5往復。えらい違いやなー！なんて思いながらパパは頑張りました。。。

■■■ Prof. Olivier Guyen

リヨンに到着する前に次の病院へ確認メールをしたらNeyret先生は出張で翌週から病院に戻るが、他のメンバーがしっかりしてるから大丈夫だよとのこと。なんだよー、せっかくきたのにどうしようかな？なんて考えていたら、日仏学会のメンバーであるGuyen先生からもメールが。明日、うちの病院に來い、お前のためにいろいろ手術settingしたからと。これまで全然連絡くれてなかったのに無茶やなー、なんて思いながら「これも何かの流れだな。」と思い、急遽訪問先をHopital Edward Herriot追加変更させていただく事としました。

Guyen先生は、国際的な感覚をもたれた、近代的な先生との印象を持ちました。また、日本にもたくさんお知り合いがおられ、非常に優しい先生でした。挨拶も程々に手術室へ。行ってみると3部屋のみだったので、



まあ中規模の病院か？なんて思いながら軽く病院の規模を聞いてみたらbig sizeだと？この病院は地下鉄の駅前にあり整形外科建物まで10分程歩いたのですが、この建物にたどり着くまで、実は20以上のパビリオンがありました。それら全部が病院の敷地内で、それぞれの専門科ごとに建物が違うとの事でした。ちなみに整形外科内でも脊椎と、上肢外傷、下肢外傷で3つに分かれているとの事でした。手術は高位脛骨骨きり術、TKA revision、THA dual cupなどを見せていただきました。また、Guyen先生のお計らいで、フランス整形外科機器メーカーであるAmplitudeに訪問させていただく機会を得ました。研究開発レベルから、3Dプリンターを活用した患者さんオーダーメイドに骨きりガイ



●Dr. Oliver Guyenと



●手術風景

ド(PSI)の作成など興味深い経験となりました。滞在期間中に日本とのLive Surgeryにも参加させていただきました。非常に貴重な経験をさせていただきました。

■■■ Prof. Philippe Neyret

ようやく、待ちに待ったNeyret先生の病院へ訪問となりました。Neyret先生は2015年ISAKOSの会長をされ、国際的に著名な先生でこれまで毎年のように日本からもフェローが訪問しています。外来、手術と見学させていただきました。外来は2部屋、それぞれに秘書さん、interneが診察の準備をします。患者さんはズボンをすでに脱いだ状態でベッドに横たわって診察を待っています。Neyret先生はその2部屋を行ったり来たりされ、午前中で35名もの診察を急ぐ事なく行っておられました。我々と異なり、カルテに記入する事も検査オーダーする事も自分ではしなくていいので、一人にかかる診察は短時間ですが患者さんとお話を十分にして診察されます。その内容を秘書さんがカルテに記入、interneが検査オーダー、術後の臨床成績はinterneがすでに確認済みと、合理的に確立され無駄が無いとの印象でした。フランスからの学会発表で、術後25年の成績など時に見られますが、このシステムならそれも可能だと納得できました。しかし自分に置き換えてみた場合、近隣の整形外科開業の先生からたくさんの患者さんを紹介してもらえるような質の高い医療を実践して続けていかないと、このような状況を作る事も不可



●患者さんオーダーメイドの人工関節骨切りガイド

能だな、と感じました。いつになるかわかりませんが、今後の日本における診療に活用していきたいです。

手術で印象に残った物として、ACL再建方法です。Lateral tenodesisといって、動揺性の強い膝の場合、関節内の靱帯再建のみならず、関節外の外側靱帯再建を行われておりました。この術式は20年以上前からされているらしいのですが、興味深い事に2012年以降、膝解剖学でanterolateral ligamentが新たに報告されました。目の前の患者や病態をしっかり検討し、その結果行われていた術式が、解剖学的にも立証されたという事でしょうか。

今回、フランスで手術見学をしていて感じた事ですが、日本で使用できるインプラントや手術手技関連機器は非常に限られたものでした。それらの開発企業に日本への導入を訪ねると、必ず日本は厚労省や臨床試験のハードルが高すぎると言う返事でした。例えば、半月板の治療ですが、日本では部分切除もしくは縫合術しか選択はありませんが、ヨーロッパでは加えて、scaffold、半月板インプラント、allograftなど患者さんの状況でさまざまな選択肢があり、それぞれすでに、中期成績などが報告されています。この現状は、日本の医療水準が世界から置いていかれるのではと危機を抱きました。日仏整形外科が構築した友好関係をもとに今後は医師の交換研修のみでなく、新規手術機器導

入などフランスを窓口積極的に行えるようなシステムが構築されれば、患者さんの治療選択の幅を広げる意味でも良いと考えます。

最後に

フランスへの印象は今となっては、180度変わりました。ディスカッションでは日本人が嫌う衝突や上下関係による遠慮などあまりなく、良い質問をする若手には握手を求めるような許容がありました。気難しく頑固でややこしいといった印象は、納得するまでディスカッションを行う気概と、プロとしてのプライドへ、気高く鼻にかかったお高い感じは、どの年代の方もおしゃれで、雨の日でもレインコートを楽しむような心の豊かさへと。

ミシュランの3つ星を40年以上維持しているリヨンの料理人ポール・ボキューズは1970年代に来日して懐石料理、京料理の料理法や盛りつけを参考にし、それまでの伝統的なフランス料理にモダンな変化を加えたと言われています。フランス整形外科も同様に、温故知新を実践しているというのが私の感想です。今回できた友情や知人を大切にしながら整形外科医療向上のために少しでも還元できればと考えています。このような機会を与えていただき心から感謝します。



● 休日のリヨン（朝市：マルシェ）

日本側・フランス側役員を紹介します

（6月の第13回AFJO終了後からこの役員に替わります。）

日本側役員

- 会長 金子 和夫
- 副会長 大橋 弘嗣
- 書記長 藤原 憲太
- 書記・会計 青木 清
- 幹事 安永 裕司
- 久保 俊一
- 本間 康弘
- 名誉会員 小野村敏信
- 小林 晶
- 坂巻 豊教
- 顧問 瀬本 喜啓

フランス側役員

- President Philippe Hernigou (Paris)
- Secrétaire General Philippe Merloz (Grenoble)
- Tresorier Philippe Wicart (Paris)
- Membre de Bureau Philippe Liverneaux (Strasbourg)
- Alain Durandau (Bordeaux)
- Jean Pierre Courpied (Paris)
- Jacques Caton (Lyon)
- Olivier Guyen (Lyon)



■ 日仏整形外科学合同会議（AFJO）開催一覧

会 期	開 催 地	議 長
第 1 回	1990年 11月12日	パ リ
第 2 回	1992年 10月 4 日	京 都
第 3 回	1994年 11月 7 日	パ リ
第 4 回	1996年 4 月13～14日	東 京
第 5 回	1998年 9 月17～19日	リヨン
第 6 回	2001年 5 月11～12日	大 阪
第 7 回	2003年 9 月26～27日	グルノーブル
第 8 回	2005年 5 月 6 ～ 7 日	京 都
第 9 回	2007年 9 月14～15日	ニース
第10回	2009年 5 月28～30日	沖 縄
第11回	2011年 6 月 2 ～ 4 日	ボルドー
第12回	2013年 5 月30～ 6 月 1 日	京 都
第13回	2015年 6 月 4 ～ 6 日	サン・マロ

■ 日仏整形外科学会（SOFJO）開催一覧

会 期	開 催 地	会 長
第 1 回	1987年 11月 6 日	神 戸
第 2 回	1988年 10月29日	東 京
第 3 回	1989年 11月11日	大 阪
第 4 回	1991年 11月 9 日	大 阪
第 5 回	1993年 10月30日	大 阪
第 6 回	1995年 5 月10日	大 阪
第 7 回	1997年 11月 1 日	大 阪
第 8 回	1999年 10月16日	大 阪
第 9 回	2000年 11月25日	横 浜
第10回	2002年 10月12日	弘 前
第11回	2004年 11月 6 日	神 戸
第12回	2006年 10月14日	京 都
第13回	2008年 9 月27日	東 京
第14回	2010年 9 月25日	広 島
第15回	2012年 9 月22日	東 京
第16回	2014年 9 月 6 日	福 岡
第17回	2016年	香 川



日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりですでお申し込みください。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募をご遠慮ください。

募 集 要 項	
1) 募集人員	若干名（平成28年度）
2) 研修条件	1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。 2. フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。 3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の滞在費、食費および移動などの費用は原則として自己負担とする。 4. 帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。 5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。
3) 応募条件	1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会専門医であること。 3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。
4) 応募に必要な書類	1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT, PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事） 2. 履歴書（大学卒業以降とする） 3. 応募の動機や抱負についての小論文 4. 日仏整形外科学会会員1名の推薦状―推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 5. 業績目録―主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要） 6. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者……………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者……………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 <u>（大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。）</u> 以上1. 以外の書式は自由であるが、すべて A4サイズに統一 し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、 コピーを15部 を同封すること。 7. 連絡用住所シール（5枚）……………希望する連絡場所を記入してあて先は～～～先生としてください。
5) 選考方法	1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成27年7月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したものには平成27年8月上旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。 面接の時間は個別に通知する。 3. 可否は平成27年8月中旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。
6) 申請締め切り	平成27年6月30日必着
7) 申し込み先	日仏整形外科学会事務局 大阪府済生会中津病院整形外科内 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院整形外科 Tel(06)6372-0333 Fax(06)6372-0339 日仏整形外科学会 係 大橋 弘嗣

フランス人研修医 受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFECOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたいお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFECOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長 小林 晶
日仏整形外科学会 交換研修係 小林 晶
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）
LU7H-OOHS@asahi-net.or.jp

第13回日仏整形外科合同会議 開催のご案内 (Congrès AFJO 2015)



13th Congres of AFJO

Saint-Malo - France - 2015

Organized by
Ph Hernigou - L Kerboul

June 4th, Thursday

16:30 Welcome Tour : visit of Saint-Malo old city and harbour
<http://fr.wikipedia.org/wiki/Saint-Malo>

19:00-22:00 Registration at the Saint-Malo congress center
<http://www.legrandlarge-congres.com>

Opening address, congress presentation in the panoramic room
Welcome Collation and short lecture about Saint-Malo



June 5th, Friday

Registration
Scientific program at the Saint-Malo congress center

8:00 Pr Shichikawa Eulogy and Remembrance speech

8:30-12:15	Scientific program
12:30-13:30	Lunch on seminars
14:00-16:00	Scientific program



16:00-22:00 Special visit by bus to the Mont Saint-Michel and Banquet in the Mont-Saint-Michel Abbey (X-XIV century) - Return with a site seeing stop
<http://mont-saint-michel.monuments-nationaux.fr>

June 6th, Saturday

Scientific Program at the Saint-Malo congress center

8:00-12:15	Scientific program
12:30-13:30	Lunch on seminars
14:00-15:30	Scientific program
15:30-16:00	Closing address



16:00 Special visit by bus to the medieval city of Dinan and Closing Diner
<http://www.dinan-tourisme.com/IMG/pdf/groupe2014.pdf>

Lady's Program under preparation: June 5th morning : Visit of the city of Dinard with return by boat and site seeing on Saint-Malo - June 6th morning : Visit on the Emerald Coast with stops to cap Frehel and Fort La Latte
http://fr.wikipedia.org/wiki/Côte_d'Émeraude

e-mail : philippe.hernigou@wanadoo.fr

Inscription and accomodation : contact@legrandlarge-congres.com

Hotels : near the historical area and congress center

Access : by train TGV from Paris-Montparnasse to Rennes with connection to Saint-Malo

第17回日仏整形外科学会

(17ème Réunion de Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

開催のご案内(第1報)

2016年の第17回日仏整形外科学会(SOFJO)の予定についてご報告いたします。

今回、大阪医科大学藤原憲太と旭川荘療育・医療センター(岡山)青木 清による共同開催とさせていただくこととなりました。力を合わせ良い会にしたいと考えております。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの金城 健にも事務局長としてサポートしてもらう予定です。

開催地は、百人一首で小野篁が「わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人のつり舟」と詠んだ八十島(やそしま)=多島海で知られる瀬戸内海に浮かぶ直島で行いたいと考えております。直島は藤原が生まれ育った四国地方と青木が生まれ育った中国地方の中間地点に位置しています。国内ではそれほど知名度は高くありませんが、定期的開催される瀬戸内国際芸術祭の中心地でもあり、安藤忠雄設計の地中美術館(モネを所蔵しています)はじめ草間和代のオブジェなど芸術の島として有名で、トラベラー紙では「死ぬまでに行きたい場所」にも選ばれている場所です。

会期中はたくさんの帰朝報告をはじめ、「芸術と科学(医学)の調和(仮)」をテーマに会員の皆様に興味を持っていただけるシンポジウムを企画していこうと考えています。またこの絶好のロケーションを十分楽しんでいただけるように、瀬戸内海を見下ろしながらのウェルカムレセプション、テラスレストラン「海の星(Etoile de la mer)」でのパンケット、ワインのハンズオンなども検討しています。

開催日時は、2016年11月下旬を計画しています。ゆっくりとした島時間を過ごしながら、皆様と日仏というキーワードで様々な分野の意見交換ができればと考えております。ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

大阪医科大学整形外科学教室 藤原憲太

旭川荘療育・医療センター 青木 清



●開催予定地 直島



●地中美術館



.....学会各種ご案内・お知らせ.....

1



仏日・日仏整形外科学用語集

仏日整形外科用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の仏日整形外科用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に用語集も追いついて行く必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となってその後の時代に応じて出現した新語を大幅に追加して新しい用語集の編集を行なってもらいました。最終的には単語数は仏日がおおよそ7000語、日仏はおおよそ6200語となりました。編集にあたりましては、日本整形外科学会学術用語委員会から綿密な指導をいただき、また最後には診断と治療社編集部のみなさんの度重なる校正を受けて2013年5月に出版の暁となりました。

購入希望がありましたら事務局までご連絡下さい。診断と治療社のホームページからでも購入していただけます。また、会員の方は学会ホームページからダウンロードもできます。是非ご活用下さい。

2

七川歓次先生追悼集

去る2014年4月21日に日仏整形外科学会名誉会長七川歓次先生が逝去されました。突然の訃報にわれわれ学会員は驚き、悲しましました。七川先生の日仏整形外科学会への多大なご功績を偲び、ささやかな追悼集を作製しました。ここには七川先生のご略歴や学会参加に参加されたときの写真集とともに3回にわたってINFOSに「シリーズ・日仏整形外科友好の礎」と題する原稿もまとめて小冊子として作製しております。事務局の方にまだ残りがございますので、ご希望がありましたら差し上げます。事務局(大橋弘嗣)までご連絡ください。

3



Welcome to So.F.J.O Homepage

ようこそ日仏整形外科学会(SOFJO)のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。是非のぞいてみてください。

- | | |
|----------|------------------|
| ・新着/NEWS | ・交換研修 |
| ・沿革 | 交換研修帰朝報告 |
| ・活動内容 | ・会誌INFOS |
| 入会のご案内 | ・仏日・日仏整形外科用語集 |
| ・役員紹介 | ・日仏整形外科協議会(AFJO) |
| ・共同研究 | ・AFJO(English) |
| | ・関連リンク集 |

平成25年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,050,000
用語集販売	36,000
企業寄附	1,060,000
広告料	480,000
預金利息	171
前年度繰越金	2,040,987
計	4,667,158

歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金 渡航費＋滞在費（一部）	300,000
フランス人交換整形外科医奨学金 0名	0
SOFJO/AFJO開催関係費	0
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	0
日仏共同研究、研究助成金	0
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	1,595,000
インターネットホームページ維持管理費	338,460
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	74,990
事務費	21,210
アルバイト代	168,000
会議費	27,935
旅費・交通費	265,160
連絡員費用（ジランさん）	184,410
印刷費	588,000
雑費	2,835
出金小計	3,566,000
次年度繰越金	1,101,158
計	4,667,158

平成26年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,000,000
企業寄附金	900,000
広告料	800,000
預金利息	300
前年度繰越金	1,101,158
計	3,801,458

歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金 渡航費＋滞在費（一部）100,000×4名	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金 滞在費（2ヶ月）＋交通費 100,000×2名	200,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	20,000
日仏共同研究、研究助成	200,000
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	0
インターネットホームページ維持管理費	340,000
事務局（通信費、事務費、アルバイト代）	
通信費	80,000
事務費	20,000
アルバイト代	200,000
会議費	30,000
旅費・交通費	250,000
連絡員費用（ジランさん）	200,000
印刷費	800,000
予備費	10,000
出金小計	2,750,000
次年度繰越金	1,051,458
計	3,801,458

これまでに交換研修に
参加された先生方

年度	氏名	所属医局
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柁原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田 幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾 篤	九州大学
2006	小室 元	阪和住吉総合病院
2006	城戸 顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田 宗彰	総合せき損センター
2007	黒住 健人	高知医療センター
2007	菊池 克久	滋賀医科大学整形外科

年度	氏名	所属医局
2008	上島圭一郎	京都府立医科大学
2008	水野 直子	行岡病院
2008	金澤 博明	順天堂浦安病院
2008	渡辺 千聡	大阪医科大学
2009	浅田 卓	関西医科大学
2009	山本りさこ	広島大学
2010	塚本理一郎	湘南鎌倉人工関節センター
2010	奥村 法昭	滋賀医科大学
2011	久保田光昭	順天堂大学
2011	西脇 徹	慶応義塾大学
2011	斉藤 朝海	東京女子医大膠原病 リウマチ痛風センター
2011	金城 健	沖縄県立南部医療センター
2012	齋藤 正純	京都府立医科大学
2012	成尾 宗浩	東名厚木病院
2012	渡辺 新	高萩協同病院
2012	小池 洋一	仙台赤十字病院
2012	長谷川浩士	公立置賜総合病院
2013	野口 森幸	仙台赤十字病院
2013	相川 淳	北里大学
2013	高澤 誠	千葉大学
2013	市原 理司	順天堂浦安病院
2013	百村 励	順天堂大学
2013	二村 昭元	東京医科歯科大学
2013	越智 健介	東京女子医大膠原病 リウマチ痛風センター
2013	吉田 雅人	名古屋市立大学
2013	竹本 充	京都大学
2013	田村 太質	大阪府立母子保健 総合医療センター
2014	江 口 和	下志津病院
2014	深沢 克康	関東労災病院
2014	児玉 成人	滋賀医科大学
2014	荒瀧 慎也	岡山大学
2014	大槻 周平	大阪医科大学
2015	菊池 克彦	千早病院
2015	木島 泰明	秋田大学
2015	仲西 康顕	奈良県立医科大学
2015	木田 圭重	京都府立医科大学

6

これまでにフランスから
交換研修医として
来られた先生方と研修施設

年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LIVERNEAUX	京都府立医科大学・ 広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・ 滋賀小児センター・ 福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・ 九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・ 東海大学・ 札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・ 岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・ 新潟手の外科研究所・ 広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・ 岡山大学・ 国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・ 福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・ 京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・ 慶応義塾大学・ 高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・ 山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・ 大阪市立大学
2007	Damien BREITEL	総合せき損センター・ 奈良県立医科大学
2007	Sybillе FACCA	弘前大学・山形大学・ 京都府立医科大学・ 広島大学
2008	Thomas APARD	山形大学・ 大阪府立母子保健総合医療センター
2009	François LINTZ	京都市立大学

7

年会費増額と入会金のお願い

2014年度総会の際に決定いたしました通り、2015年度より年会費を8000円に増額させていただくこととなりました。事務局としましても経費節減に取り組み運営してまいりましたが、昨今は、製薬会社や器械メーカーなどからの賛助金や広告代が減少しており、その中で、交換研修を希望される先生方のフランス留学をサポートするために財源を確保致したく、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

また、これまで入会金の徴収はしておりませんでした。この度入会金として4000円を納めていただくことになりました。ただし、入会時にはINFOSと仏日・日仏整形外科科学用語集をお送りします。

ご理解の程、よろしくお願いいたします。

8

寄附金を頂戴いたしました。
ご協力ありがとうございました。

サントリーホールディングス株式会社
日本ストライカー株式会社
センチュリーメディカル株式会社
参天製薬株式会社
第一三共株式会社
日本イーライリリー株式会社
MSD株式会社
有限会社永野義肢
川村義肢株式会社
ヤンセンファーマ株式会社 （順不同）

編集 後記

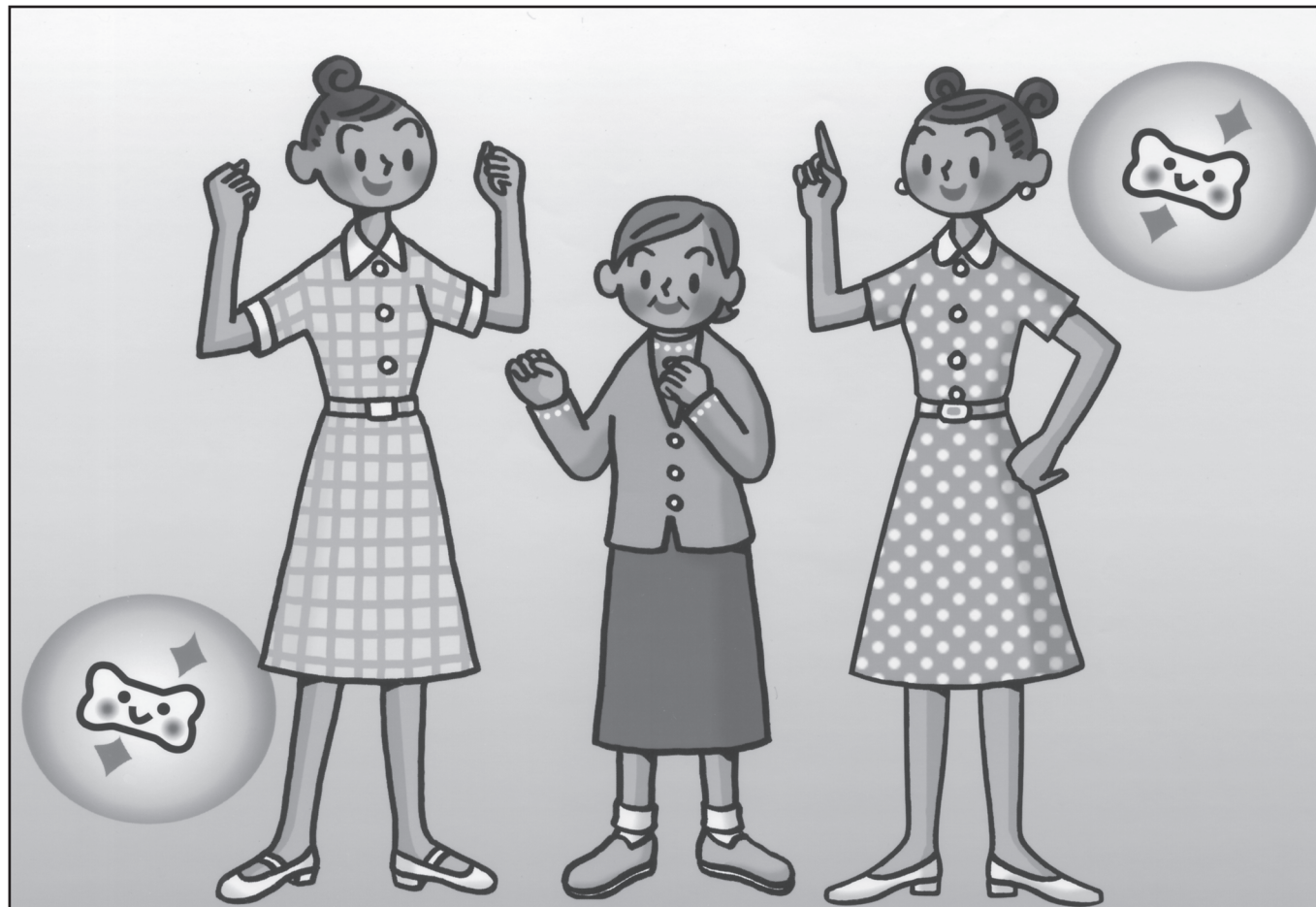
昨年は整形外科の巨匠といわれる先生が何人か亡くなされました。われわれは特に七川歓次日仏整形外科学会名誉会長の訃報に悲しましました。ある会員の先生から、七川先生に是非昔の話を聞いておけとの助言をいただき、七川先生に無理をお願いして書いていただいた「シリーズ・日仏整形外科友好の礎」が第3回で遺稿になるとは思っても見ませんでした。まだまだ七川先生には教えていただきたいことがありますが残念です。謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。

さて、日仏整形外科学会は塩田悦二教授が会長をされて2014年9月6日に福岡で開催されました。3名のフランスからの先生を招待され、非常に内容の濃い学会であったと思います。たくさんの写真もいただきましたので、その一部を掲載させていただきました。

交換研修帰朝報告は7名の先生からいただきました。研修の様子を詳しく書いていただいておりますので、フランス整形外科の生の現状が分かり、興味深い内容です。これから交換研修を考えておられる先生にも参考になると思います。

今後の学会予定は2015年6月に第13回日仏整形外科合同会議(AFJO)がノルマンディー地方のサン・マロで行われます。風光明媚な保養地であり、近くには世界遺産のモン・サン・ミッシェルがあります。多くの先生方の参加をお待ちしています。また、2016年には藤原憲太先生と青木清先生が会長となって第17回日仏整形外科学会(SOFJO)が計画されています。

2008年9月から会長を務められた小林晶先生が2015年6月のAFJOをもって会長を退任されます。日本整形外科学会との関係改善、仏日・日仏整形外科科学用語集の編纂、交換研修制度の充実など多くのことに貢献されました。次期会長は順天堂大学の金子和夫教授が就任されます。今後とも日仏整形外科学会の活動にご協力をいただけますようお願いいたします。



エーザイの骨粗鬆症関連製品

骨粗鬆症治療剤

日本薬局方 リセドロン酸ナトリウム錠

劇薬 処方せん医薬品 注意一医師等の処方せんにより使用すること
[薬価基準収載]

アクトネル[®] 錠 75mg

骨粗鬆症治療用ビタミン K₂ 剤

メナテトレノン製剤

[薬価基準収載]

グラケー[®] カプセル 15mg

[体外診断用医薬品] (電気化学発光免疫測定法)

低カルボキシル化オステオカルシンキット [検体検査実施料収載]

血清中低カルボキシル化オステオカルシン (ucOC) 測定用医薬品

ピコル[®] ucOC[®] ※ 販売提携品

● 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

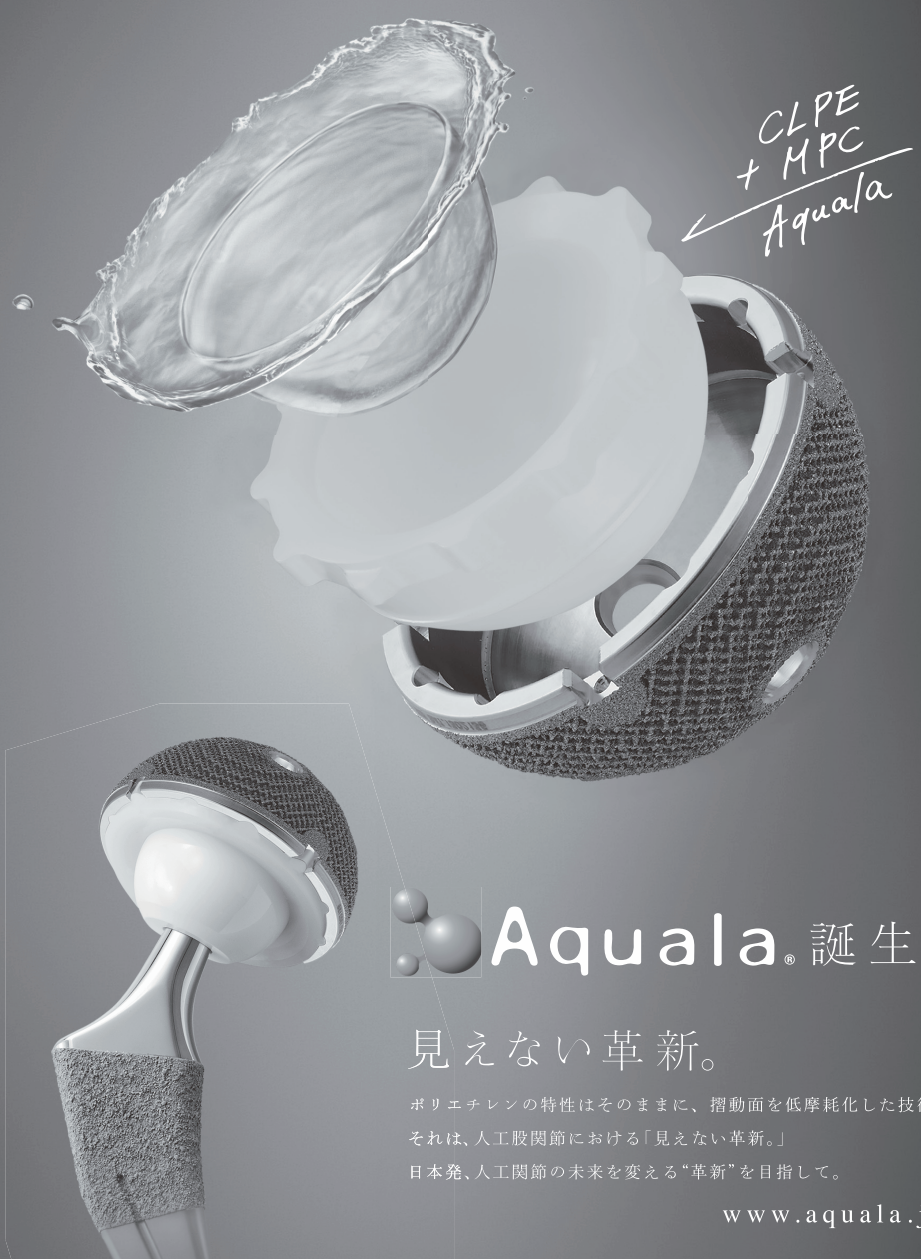
Eisai エーザイ株式会社

〒112-8088 東京都文京区小石川 4-6-10

製品情報お問い合わせ先:

エーザイ株式会社 お客様ホットライン

フリーダイヤル 0120-419-497 9~18時(土、日、祝日 9~17時) ACL1308M01



CLPE
+ MPC
Aquala

Aquala® 誕生

見えない革新。

ポリエチレンの特性はそのままに、摺動面を低摩耗化した技術。
それは、人工股関節における「見えない革新。」
日本発、人工関節の未来を変える“革新”を目指して。

www.aquala.jp

京セラメディカル株式会社

札幌営業所 Tel.011-280-6020	大宮営業所 Tel.048-640-7779	京都営業所 Tel.075-353-4322	岡山営業所 Tel.086-803-3620	九州営業所 Tel.092-452-8140
東北営業所 Tel.022-216-5176	名古屋営業所 Tel.052-930-1481	大阪営業所 Tel.06-6350-1017	広島営業所 Tel.082-212-1003	

<http://kyocera-md.jp/>



センチュリーメディカルの整形外科分野

整形外科分野取扱製品：

人工関節置換術・骨接合術など、

整形外科分野の

手術療法に用いる製品

New Release

GAME READY

ゲームレディは、瞬時に間欠的圧迫と全周的冷却を同時に行う最新のアイシングシステムです。



<販売名> ゲームレディ <製造販売届出番号> 13B1X10129000002
<販売名> ゲームレディ専用ラップ <製造販売届出番号> 13B1X10129000003
<外国製造業者> Cool Systems Inc.
<製造・販売業者> 株式会社メディックファースト
<販売業者> センチュリーメディカル株式会社

CMI Partner in HealthCare
センチュリーメディカル株式会社

本社 〒141-8588 東京都品川区大崎1丁目11番2号
PHONE:(03)3491-1601 FAX:(03)3491-2788
大阪支店 〒541-0053 大阪市中央区本町1丁目7番6号
PHONE:(06)6263-5815 FAX:(06)6263-3756

03ALL001-01

骨形成促進剤

という選択肢。

BMD増加効果と骨折発生リスクの抑制

- *【禁忌(次の患者には投与しないこと)】
1. 高カルシウム血症の患者[高カルシウム血症を悪化させるおそれがある。]「重要な基本的注意」の項参照
 2. 次に掲げる骨肉腫発生リスクが高いと考えられる患者[「その他の注意」の項参照]
 - (1) 骨ペーজেット病の患者
 - (2) 原因不明のアルカリフォスファターゼ高値を示す患者
 - (3) 小児等及び若年者で骨端線が閉じていない患者[「小児等への投与」の項参照]
 - (4) 過去に骨への影響が考えられる放射線治療を受けた患者
 3. 原発性の悪性骨腫瘍もしくは転移性骨腫瘍のある患者[症状を悪化させるおそれがある。]
 4. 骨粗鬆症以外の代謝性骨疾患の患者(副甲状腺機能亢進症等)[症状を悪化させるおそれがある。]
 5. 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦[「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照]
 6. 本剤の成分又はテリパラチド酢酸塩に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能・効果】 骨折の危険性の高い骨粗鬆症

<効能・効果に関連する使用上の注意> (1) 本剤の適用にあたっては、低骨密度、既存骨折、加齢、大腸骨頭部骨折の家族歴等の骨折の危険因子を有する患者を対象とすること。(2) 男性患者での安全性及び骨折予防効果は確立していない。

- *【用法・用量】 通常、成人には1日1回テリパラチド(遺伝子組換え)として200 μ gを皮下に注射する。なお、本剤の投与は24か月間までとすること。

<用法・用量に関連する使用上の注意> (1) 本剤を投与期間の上限を超えて投与したときの安全性は確立していないので、本剤の適用にあたっては、投与期間の上限を守ること。[「その他の注意」及び「臨床成績」の項参照] (2) 本剤の投与をやむを得ず一旦中断したのちに再投与する場合であっても、投与回数(合計)24か月を超えないこと。また、24か月の投与終了後、再度24か月の投与を繰り返さないこと。(3) 他のテリパラチド製剤から本剤に切り替えた経験はなく、その安全性は確立していない。なお、他のテリパラチド製剤から本剤に切り替えたときにおける本剤の投与期間の上限は検討されていない。[「その他の注意」の項参照]

- *【使用上の注意】 1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) (1) 腎障害のある患者[外国の臨床試験において、重度の腎障害患者では血中からのテリパラチドの消失が遅延が認められている。]「薬物動態」の項参照 (2) 重度の肝障害のある患者[本剤の重度の肝障害患者における使用経験が少なく安全性は確立していない。] (3) 尿路結石のある患者及びその既往歴のある患者[本剤の投与により、症状を悪化させるおそれがある。] 2. 重要な基本的注意 (1) 本剤の薬理作用により、投与後約4から6時間を最大として一過性の血清カルシウム値上昇がみられる。また、血清カルシウム値は投与後16時間ではほぼ基準値まで低下することと認められているため、本剤投与患者における血清カルシウム値を測定する場合は、本剤投与後16時間以降の測定値を評価基準とすること。本剤の投与にあたっては、患者に十分な説明を行い、特に、嘔気、嘔吐、便秘、腹痛及び筋力低下等の持続性の血清カルシウム値上昇が疑われる症状が認められた場合は、速やかに診察を受けるように指導すること。持続性高カルシウム血症の診断は、血清カルシウム値と測定時点を考慮し、持続性高カルシウム血症と判断された場合は、本剤の投与を中止すること。なお、血清カルシウム値上昇によるシグナリスの作用が増強することがあるため、シグナリス製剤と併用する時は注意すること。[「相互作用」の項参照] (2) 副甲状腺ホルモンは血管平滑筋の収縮作用や心筋の増進作用、増進作用を示すことが報告されている。心疾患のある患者には、患者の状態を観察し、病態の悪化がないか注意しながら本剤を投与すること。(3) 腎障害のある患者においては、定期的に腎機能検査を行うこと。(4) 閉経前の骨粗鬆症患者での安全性及び有効性は確立していない(Saag KG, et al., Arthritis Rheum. 60, 3346-3355, 2009)。(5) 起立性低血圧、めまいがあらわれることがあるので、高所での作業、自動車の運転等危険を伴う作業に従事する場合には注意すること。 3. 相互作用 併用注意(併用に注意すること) 活性型ビタミンD製剤(アルファカルシドール、カルシトリオール、メカカルシール、フレグロステロール、エルゲカルシール等)、ジギタリス製剤(ジゴキシン等) 4. 副作用 国内のプラセボを対照とした臨床試験において、本剤10～40 μ g/日を投与した安全性評価対象252例中50例(19.8%)に副作用(臨床検査値異常を含む)が認められた。主な副作用は、血中尿酸上昇9例(3.6%)、頭痛7例(2.8%)、悪心7例(2.8%)、ALP上昇5例(2.0%)、筋痛3例(1.2%)、高尿酸血症3例(1.2%)、食欲不振3例(1.2%)、血中尿酸上昇3例(1.2%)であった。なお、プラセボを投与した105例中11例(10.5%)に副作用(臨床検査値異常を含む)が認められた。注) 本剤の用法・用量はテリパラチド(遺伝子組換え)として1日1回200 μ g皮下投与である。

その他の使用上の注意については製品添付文書をご参照ください。
2011年10月改訂(第7版)

製造販売元(資料請求先)

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086 神戸市中央区磯上通7丁目1番5号

FRT-ADA2(RD)

2012.04

フォルテオ[®]
皮下注キット600 μ g
テリパラチド(遺伝子組換え)注射剤
—— 骨粗鬆症治療剤 ——

処方せん医薬品 薬価基準収載
(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

Hisamitsu[®]

9つの疾患・症状^{*}に 適応のある 経皮鎮痛消炎剤

※詳細は、効能・効果の項目をご参照下さい。

経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン 2% [薬価基準収載]
モーラス[®]テープ 20mg
経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン 2% [薬価基準収載]
モーラス[®]テープL 40mg

【禁忌】(次の患者には使用しないこと)

- (1) 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者〔「重要な基本的注意」の項(1)参照〕
- (2) アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者[喘息発作を誘発するおそれがある。]
- (3) チアプロフェン酸、スプロフェン、フェノフィブラート並びにオキシベンゾン及びオクトクリレンを含有する製品(サンスクリン、香水等)に対して過敏症の既往歴のある患者[これらの成分に対して過敏症の既往歴のある患者では、本剤に対しても過敏症を示すおそれがある。]
- (4) 光線過敏症の既往歴のある患者[光線過敏症を誘発するおそれがある。]
- (5) 妊娠後期の女性〔妊婦、産婦、授乳婦等への投与〕の項参照)

【効能・効果】

○下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎

腰痛症(筋・筋膜性腰痛症、変形性脊椎症、椎間板症、腰椎捻挫)、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
○関節リウマチにおける関節局所の鎮痛

【効能・効果に関連する使用上の注意】

- (1) 本剤の使用により重篤な接触皮膚炎、光線過敏症が発現することがあり、中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、治療上の有益性が危険性を上回る場合にのみ使用すること。
- (2) 損傷皮膚には本剤を使用しないこと。

【用法・用量】

1日1回患部に貼付する。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に使用すること)
気管支喘息のある患者[アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。]
(「重大な副作用」の項2)参照
2. 重要な基本的注意

- (1) 本剤又は本剤の成分により過敏症(紅斑、発疹、発赤、腫脹、刺激感、痒疹等を含む)を発現したことがある患者には使用しないこと。
- (2) 接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり、中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので、使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。(「重大な副作用」の項3)4)参照)
 - 1) 紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、痒疹感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、使用後数日を経過して発現する場合があるので、同様に注意すること。
 - 2) 光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光す

ること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過させるおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色物の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるので、使用後も当分の間、同様に注意すること。異常が認められた場合には直ちに本剤の使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。

(3) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分に行い慎重に使用すること。

(4) 腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。

1) 本剤による治療は対症療法であるので、症状に応じて薬物療法以外の療法も考慮すること。また、投与が長期にわたる場合には患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。

(5) 関節リウマチにおける関節局所の鎮痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。

1) 関節リウマチに対する本剤による治療は対症療法であるので、抗リウマチ薬等による適切な治療が行われ、なお関節に痛みの残る患者のみに使用すること。

2) 関節痛の状態を観察しながら使用し、長期にわたり漫然と連用しないこと。また、必要最小限の枚数にとどめること。

3. 相互作用

【併用注意】(併用に注意すること)

メトレキサート

4. 副作用

○腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
総症例1,156例中副作用が報告されたのは57例(4.93%)であり、発現した副作用は、発疹11件、発赤9件、痒疹感18件、刺激感5件等の接触皮膚炎54件(4.67%)、貼付部の膨疹、動悸、顔面及び手の浮腫各1件(0.09%)などであった。(承認時)

○関節リウマチ
総症例525例中副作用が報告されたのは45例(8.57%)であり、発現した副作用は、接触性皮膚炎17件、適用部位痒疹感12件、適用部位紅斑6件、適用部位発疹6件、適用部位皮膚炎3件等であった。(効能追加承認時)
ほかに医師などの自発的報告により、ショック、アナフィラキシー、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、光線過敏症の発現が報告されている。

(1) 重大な副作用

- 1) ショック(頻度不明)、アナフィラキシー(0.1%未満)
ショック、アナフィラキシー(尊麻疹、呼吸困難、顔面浮腫等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止し、適切な処置を行うこと。
- 2) 喘息発作の誘発(アスピリン喘息)(0.1%未満)
喘息発作を誘発することがあるので、乾性ラ音、喘鳴、呼吸困難等の初期症状が発現した場合は使用を中止すること。気管支喘息患者の中には約10%のアスピリン喘息患者が潜在していると考えられているので留意すること。なお、本剤による喘息発作の誘発は、貼付後数時間で発現している。【禁忌】の項(2)参照)
- 3) 接触皮膚炎(5%未満、重篤例は頻度不明)
本剤貼付部に発現した痒疹感、刺激感、紅斑、発疹、発赤等が悪化し、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日を経過してから発現することもある。
- 4) 光線過敏症(頻度不明)
本剤の貼付部を紫外線に曝露することにより、強い痒疹を伴う紅斑、発疹、刺激感、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日から数カ月を経過してから発現することもある。

- その他の使用上の注意については添付文書をご参照ください。
- 添付文書の改訂に十分ご留意ください。

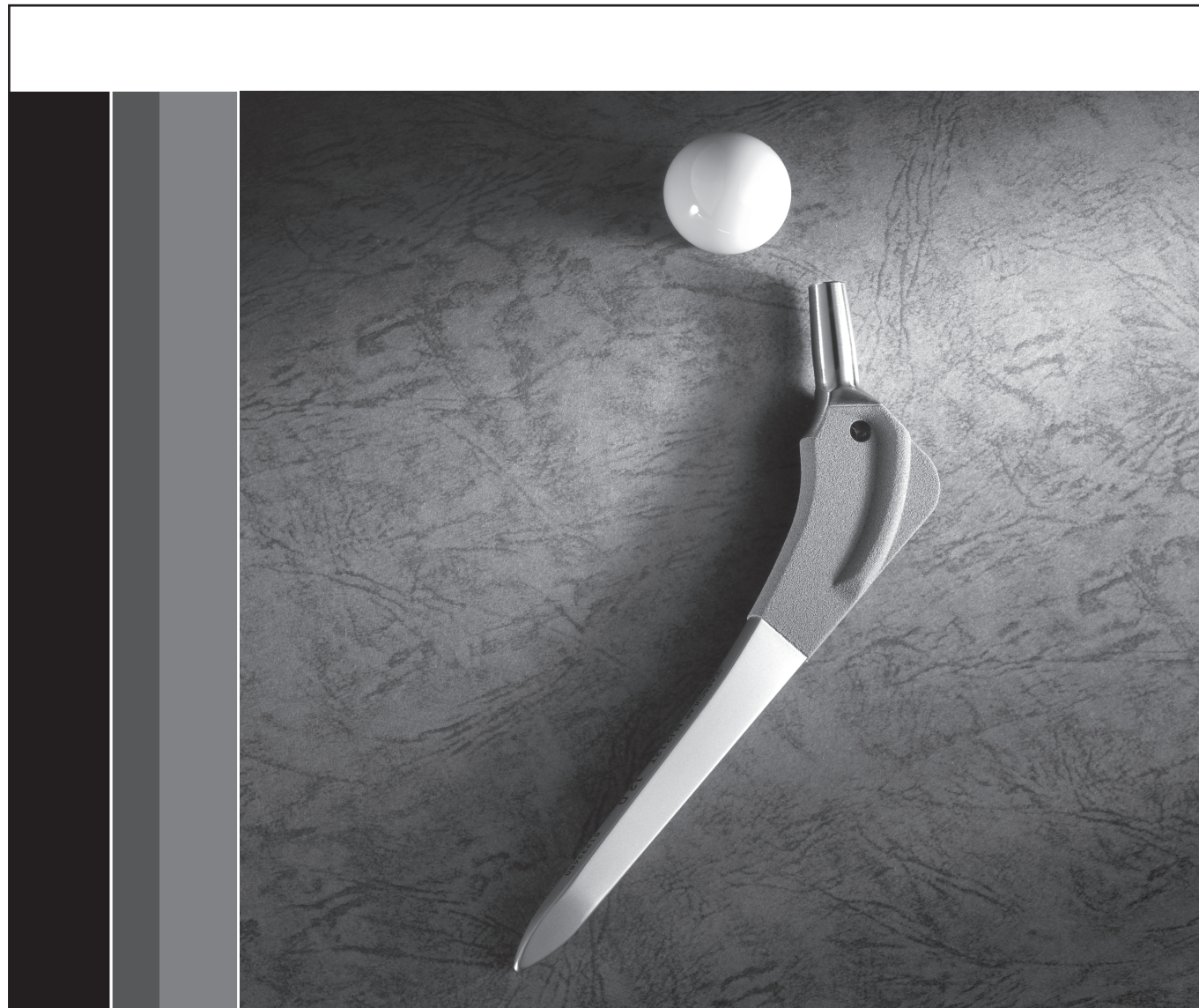
2014年4月作成

製造販売元



久光製薬株式会社 〒641-0017 鳥橋市田代大宮町408

資料請求先: 学術部 お客様相談室 〒100-6330 東京都千代田区丸の内2-4-1



Aesculap® BiCONTACT®

Over 700,000 units Experience in the World*

Aesculap - a B.Braun company

B | BRAUN
SHARING EXPERTISE

製造販売元

ビー・ブラウンエースクラップ株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷2-38-16 TEL.03(3814)2524 FAX.03(3814)6110

www.bbraun.jp

カスタマーサービスセンター：0120(16)1743 FAX.0120(62)1108

札幌営業所：011(726)3537 FAX.011(726)8477 仙台営業所：022(224)0780 FAX.022(224)0782 東京営業所：03(3814)2524 FAX.03(3814)6110
名古屋営業所：052(232)7371 FAX.052(232)7372 大阪営業所：06(6223)0770 FAX.06(6223)0773 福岡営業所：092(431)6680 FAX.092(431)6681

*2013年3月 当社調べ

販売名：ハイコンタクト・トータルヒップシステム（プラズマボアコーティング） 承認番号：20400BZY01243000
販売名：セラミックヒップシステム デルタ 承認番号：22400BZX00248000

松本アンプリチュード株式会社は、
株式会社 松本医科器械 と アンプリチュード社
との、人工関節を日本国内で販売する日仏合弁会社です。

Matsumoto AMPLITUDE

Movements for the Active life

松本アンプリチュード株式会社

〒113-0034 東京都文京区湯島4-1-11 南山堂ビル
TEL: 03-6801-8220 FAX: 03-6801-8221
<http://www.matsumotomed.jp>
<http://www.amplitude-ortho.com/>



MORE THAN
150,000
AMIS

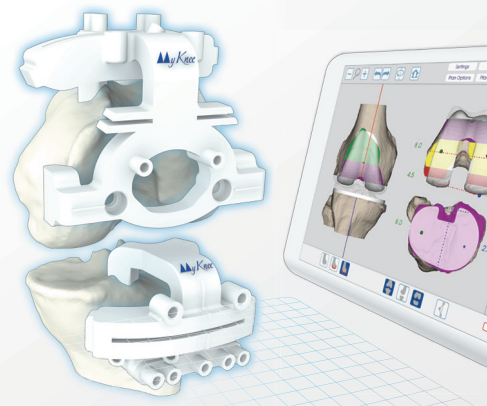
AMIS^{*}
ANTERIOR MINIMALLY INVASIVE SURGERY
IN HIP REPLACEMENT

筋肉への侵襲を与えない筋間アプローチです
早期のリハビリテーションの開始及び期間の短縮が期待出来ます
豊富な臨床実績にて証明されております
術後長期に亘る臨床上的有効性が期待出来ます

*AMIS(エイミス)とは「Anterior Minimally Invasive Surgery – 前方進入によるTHA MIS手術」を示しメダクタインターナショナルが登録商標を行っています。

MyKnee[®]
PATIENT MATCHED TECHNOLOGY
IN KNEE REPLACEMENT

Designed for you
by you!



器械の有用性: MyKnee[®]の実証された精度と効果^[1,2,3]

ピンポジショナーとしてのみではなくカッティング・ブロックとしての機能を装備

CT及びMRI両システムに対応可能

医療施設での手術時間と費用の顕著な削減—手術1セッションごとに1症例の追加が期待出来ます^[4,5]

オンラインによる対話式3Dプランニング

完全な社内技術によりMyKnee[®]専属エンジニアがサポートを行い、発注から納品までの時間はわずか3週間!

[1] Anderl W et al, CTbased patientspecific vs. conventional instrumentation: Early clinical outcome and radiological accuracy in primary TKA: Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc. 2014 [2] Koch P, Müller D, Pisan M, Fucentese S, Radiographic accuracy in TKA with CTbased patientspecific cutting block technique, Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc. 2013 Oct;21(10):2200-5. [3] Nabavi et al, Assessment of the Accuracy of TKR's Performed Using Patient Matched Technology by Computed Tomography, Podium Presentation at the 27th ISTA congress Kyoto, Sept 24-27, 2014 [4] Goldberg T, MyKnee[®] economical and clinical results. Podium Presentation at the 6th M.O.R.E. International symposium, Stresa, Italy, May 13-14, 2011. [5] Gagna G, Aspects économiques de la technologie sur mesure MyKnee en chirurgie prothétique du genou, Podium Presentation at the SOFCOT Annual Meeting, Paris, November 11-14, 2012.

承認番号: 22400BZX00482000
一般名: 患者適合型単回使用関節手術用器械
販売名: MyKnee カッティングブロック

メダクタジャパン株式会社
東京都千代田区永田町2丁目17-8
千代田/ウス201
TEL: 03-5510-8883

Medacta
International
medacta.jp

© 2015 Medacta International SA. All rights reserved.

血液凝固阻止剤
生物由来製品、創薬、処方せん医薬品 (注意—医師等の処方せんにより使用すること)

フレキサン[®]皮下注キット2000IU
エノキサパリンナトリウム注射液 ●薬価基準収載

★「効能又は効果」、「用法及び用量」、「警告、禁忌を含む使用上の注意」等、詳細につきましては現品添付文書をご参照ください。
★資料は当社医薬情報担当者に
ご請求ください。

発売(資料請求先):
科研製薬株式会社
東京都文京区本駒込2丁目28-8
2012年10月 CLS01CE

製造販売(輸入):
サノフィ株式会社
〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目20番2号

骨粗鬆症治療剤
創薬 処方箋医薬品^{注)}

ボンビバ[®] 静注1mgシリンジ
Bonviva[®]
ibandronate

イバンドロン酸ナトリウム水和物注
注) 注意—医師等の処方箋により使用すること

「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」などについては添付文書をご参照ください。

1st Anniversary

発売【資料請求先】
大正富山医薬品株式会社
〒170-8635 東京都豊島区高田3-25-1
お問い合わせ先: お客様相談室
☎ 0120-591-818

製造販売元
中外製薬株式会社
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1
ロシュグループ
(資料請求先) 医薬情報センター
TEL. 0120-189706 FAX. 0120-189705

® F. Hoffmann - La Roche (スイス) 登録商標

2014年8月改訂